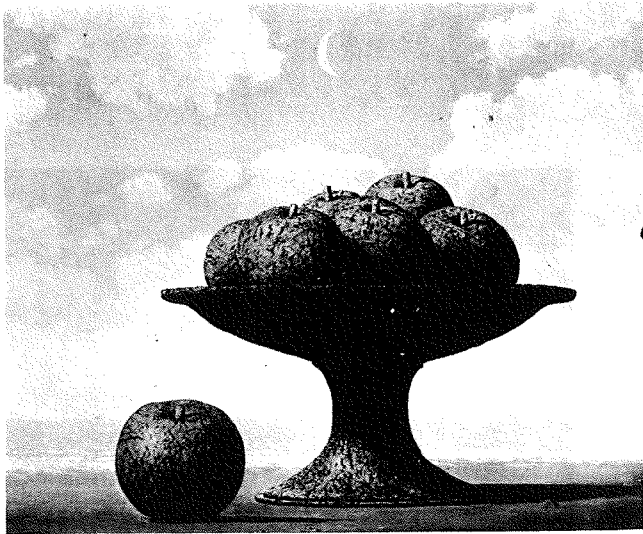


# 書評

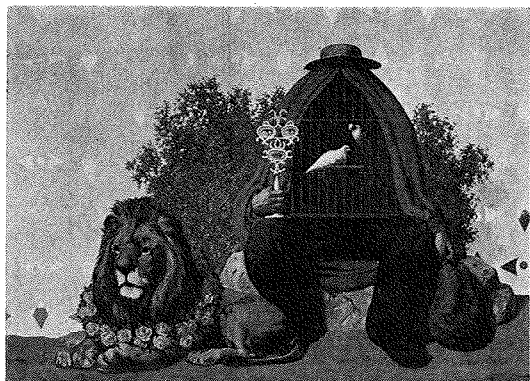
No. 53  
1980. 9



書評編集委員会

1980年9月号 通巻53号

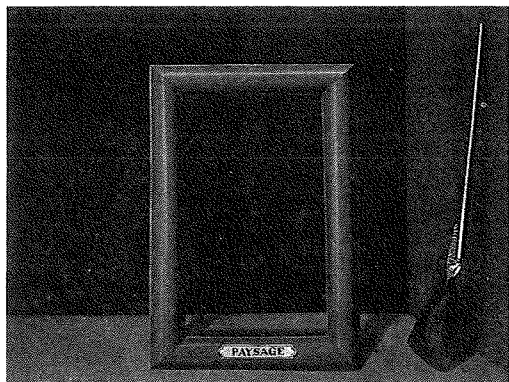
編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会  
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎ 388-1121 内線 776)  
価 値 250円



結せられた領域

早いもので大学の暦では最早秋となり、長い夏休み休暇明けの季節である。休み明けの9月は新入生にとっては大学生活で初めての試験の季節である。といっても最近では前期試験の主たる語学試験の多くは、休み前に平常試験として行われることが多いので、実際はそれほど多くないみたいである。それにしても旧態依然とした語学教育の在り方と試験の在り方は疑問といわざるを得ない。現在のような語学教育にどれだけの社会的教育的意味があるのだろうか？ 特に第2外国語はその感が強い。一般的に文法を学習し、一般的に読本を読まされるが、その内実は教養科目としての単位を修得するためのもの以外何物でもない。これは学生・教師ともである。とすれば、必須科目としての教養の第2外国語は、文字通りごくブルジョワの意味での教養（何々語を勉強したこと）があります。という高等教育の勲賞（何々語のためものといわざるを得ない。何と鼻持ちならない現実だろうか。卒業すればせいぜい単語を10個覚えておれば上等の部類に入る第2外国語とは一体何なのかを問い直す必要があるのではないだろうか？ もちろん第1外国語たる英語についても同様である。中学・高校・大学の間で、少くとも8年間は英語を学んでいるのに、実社会では大半でまともな英語のパンフレットを読める人間はごく少数しか

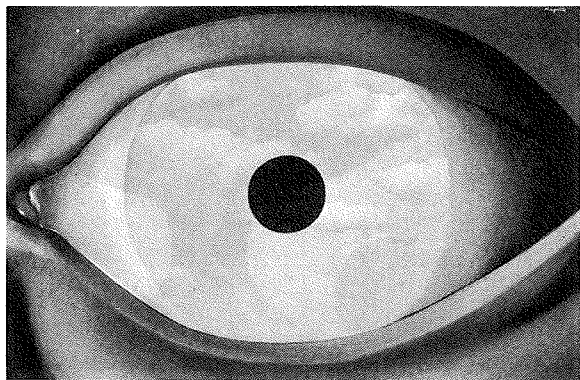
1	羅針盤	
29	差別落書問題をめぐって (2)	田宮 武
— 書評 —		
4	長須祥行著「筑波大学」 新構想は何をもたらしたか	門尾 健
20	「時計じかけのオレンジ」 についてのノート	荒木 倫子
41	日本中国 ことばの乗 <sup>は</sup> 往 <sup>り</sup> その2	芝田 稔
46	北京で生活して (1)	鳥井 克之
53	お知らせ	
54	編集後記	



風景の呪縛

いない。ましてや簡単な日常会話や事務連絡用の手紙等は書けはしない。とすれば8年間の英語教育は一体何だったのかとやはり問うべきではないだろうか？  
 こんなことは今更改めて問い返すべきことではないかも知れない。言い古されてきたことだからだ。しかし、そろそろ語学教育とは何かを真剣に問い直す時期に来ているのは確かだ。関大で語学の教育に当るのは文学部の教師である。不足分は他大学のやはり文学関係の教師である。しかし、文学部の教師で純然たる語学教育専門の教師は皆無に等しいのが現実だ。ほとんどは英文学あるいは米文学、仏文学、独文学、中国文学等の文学研究の専門家がかりである。その専門分野も古代文学から現代文学まで幅広く、又、比較文学や文学史あるいはある特定の作家や特定の時代の特異な分野の研究者も結構多い。果して、このような研究者が現代語の外国語を教育することが可能であろうか？ 不可能とい切るつもりはないが不適切であることは間違いないことである。

言葉を変えたと外国文学の研究と外国語の教育とは全く方法論が違うということである。研究分野が全く違うということは語学教育専門の研究者と文学研究者とはその資質、能力、研究対象、教育技術等が異なるということである。特に教育技術の面においては、語学教育は生



偽りの鏡

きた言葉を教育するのがその目的であるのでより重要とえる。しかも言葉は生き物である以上、年々変化していくものである。なので技術と共に最新の情報が不可欠といえる。ところが外国文学の研究は書き言葉、つまり、既使用されて固定した言葉と文章の解釈を主とするものである。いわば停止した言葉の研究といえる。繰り返されるが、文学研究と語学教育の研究は全く違うのである。全く違う研究をしているものがたまたまその外国語に精通している、というだけの理由で語学教育に携っているとすればこれは悲劇という他はない。これは学生にとっても悲劇である。その結果、学生の得るものは形式としての文法と数える程の単語だけである。全てが徒勞に終るのである。何と虚しいことであらう。

ここで別に文学部の先生方を茶化すつもりは毛頭ないし、ましてや非難する気はさらさらない。そうではなくそもそも語学教育とはどういうことなのかを考えてみるべきだといいたいのだ。外国語を学ぶということ、教えるということとはどういうことなのかをもっと真剣に問い直すべきではないだろうか。形式とたて前はどうか。歴史は動いており、社会も常に動いている。真理の探究とは歴史を先取りすることではないだろうか。(F)

## 長須祥行著 「筑波大学」

新構想は何をもたらししたか

田 尾 健

## はじめに

編集部から頭書の書評を依頼され、果して適任かどうか心もとない——筑波大学には行ったこともないし、教職員にも学生にも、だれ一人として知り合いもない、それにもともと大学問題の専門家でもないから——ままに引き受けたのは、こちらも大学人である関係上この問題を避けて通れないし、この機会にそれについて多少考えてみるのも悪いことではないと思つたからであつた。そのようなわけで、以下は筑波大学問題を通してみた、私

その紛争の後をうけて、政府のお声かりの下に新しい構想の大学として、さまざま激しい論議を巻き起こしながら誕生したのが筑波大学だが、この大学も、昨秋すでに開学六年目を迎えたという。そういった発足時の事情もあって、筑波大学は当初から社会の注目を浴び、ジャーナリズムも折にふれてその動向に関心を払つていくようである。私とて、一人の大学人として無関心たり得ず、その後の動きについては新聞その他である程度は承知しているつもりであるが、なにも体系的で、フォローしているわけではないので知識も断片的であり、このままで書評するのはあまりにも心細いので、ちょうど『朝日ジャーナル』で大学シリーズ「三百万人の大学」を連載しているのを思い出して、とりあえずバックナンバーの中から筑波大学の項（八十年一月十八日号、東京都立大助教・山住正己執筆）を探し出して読んでみた。書評に入る前に、参考までに現在の日本の大学をめぐむる状況を一瞥しておこう。右に触れた大学シリーズの新連載にあたって、『朝日ジャーナル』は「『偏差値大学』からの解放」と題する座談会（永井道雄・元文相他二名出席）を七九年三月二十三日号に掲載しているが、その冒頭で尾形憲・法政大教授が、近年の大学の姿貌を要領よくまとめているので、それに従つて見てゆくこと

のさやかな現代大学論ということになろう。

十年一昔というが、日本中、いや世界中を揺さぶつた大学紛争も、すでに一昔前の過去となった。当時、私はたまたまフランス留学というチャンスにめぐまれ、紛争の途中で、驟然たるキャンパスを後にしてフランスに出発したが、一年たらずの潜在を終えて帰国した時は、すでに一応の收拾をみた後であつた。一方、それはまた万博の年でもあって、今振り返ってみると、いわば社会的矛盾ないしは不安の表現としての紛争と、社会の繁栄の象徴としての万博が重なり合つて、そのコントラストがひどく奇妙に感じられるのである。

にしよう。

まず第一は大衆化。昭和五十三年のデータでは大学数が四三三、学生数が一八六万、教員数が九万八千を数える。短大の方は、学校数が五一九、学生数が三八万、教員数が一万六千にがし。進学率は三八・四%となっている。その他、高専、通信教育、専門学校を入れると学校数にして千校を超え、高等教育人口は三〇〇万近い数字になる。今や日本はソ連（最近のデータでは、人口一万にたいして一九二人）に追いつき、はるかに追い越してしまつた。

二番目に多様化があげられる。ヨーロッパ風の古典的な大学像にびたりしない学部、学科——家政学部、体育学部、立教大の観光学科、短大の缶詰製造学科など——が設立されている。

三番目の問題は空洞化。これは大衆化ともかかわるが、要するに目的を持たずに入学する傾向が、私学ではさらにひどくなつた。最近、大内力・元東大教授が東大の幼稚園化、東大生の幼児化を指摘して波紋を投げたが、国立でもその傾向は目立ってきている。ここで、そういった空洞化は学生だけの問題ではなく、教師の方にさえ似たような状況が出てきていることが指摘されているのに注意しよう。（最近、文学部の谷沢永一教授が現在の

大学の紀要論文を楨玉にあげて、そのおそまつさを痛烈に暴露し、日本の大学に根強い研究至上主義の風潮に疑問を投げかけたのはまだ記憶に新しいところである。

以上の三つが、この十五年間の変化としてあげられているが、さて、かかる状況にあって、筑波大学ではない何が行進しているのだろうか。

## 1

この、長須洋行著『筑波大学——新構想は何をもたらしただか』(一九八〇年現代評論社)は、この大学の現状について一つのルポルターージュを試みたものだが、著者は、紹介によれば一九三二年茨城県に生まれ、日本芸術学部を卒業後、地方新聞社、週刊誌、労組機関誌、通信社の記者及び編集社を経て、現在は主に農業農民問題のフリージャーナリストである。その間、さまざまな農民運動及び住民運動、あるいは消費者運動に関与しながらルポルターージュや評論を書き続ける、とあり、その面での著作もいろいろあるようだ。

本書(二百六ページ)は序章について、五章から成り、終章で終っているが、まず序章「筑波大生が『解放』された日」から見えてゆくことにしよう。

た大学」が、実態としては「閉ざされた大学」という乖離、矛盾がある。著者は、「そこに筑波大学のとうてい看過できない危険な体質がある」と批判し、まさにそのことを書くのが、この本の主たる目的であるというが、これが本書を貫く基調であるといつてよいだろう。

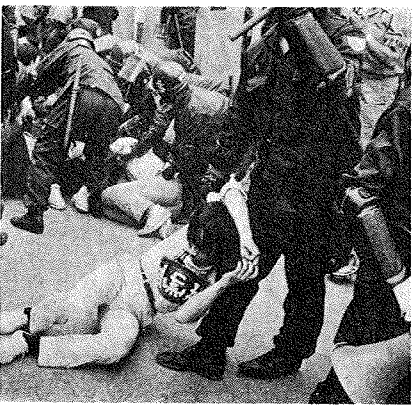
そして、本年四月から、宮島学長にかわって、筑波大学の最大の実力者と目される福田信之副学長が、実業ともに学長として登場することになり、「いよいよ、学生や教育の間に、その出現を恐れられていた福田体制によって、筑波大学の八〇年代は幕をあける」。

筑波大学が独自の管理体制をしていることはよく知られているが、第一章「学内管理体制と学生の抵抗」では、まず、先に触れた地方議員選挙における買収事件の顛末に続いて、年一回の学園祭をめぐる、それをも管理下におくこととする学校当局と、自主運営を試みる学生との攻防——「紛争なき大学」の唯一無二の紛争——が報告されている。それというのも、この管理体制の下では、学生組織も他大学とは異っているからだ。

筑波には、学生も、教官や職員と同様に大学を運営する構成メンバーなのであるから、あくまでも建学の理念や方針に責任をもたなくてはならないという三者一体論がある。このように、学生も大学自治の構成員として捉

筑波大学は、文部省が新構想のもとに、中教審路線に沿って、日本の大学の再編の先駆として設置した「モデル大学」として知られている。大学当局は「理想大学」であることを標榜し、「紛争なき大学」であることを天下に公言してきた。その、「まことに静かな大学」で、一九七八年暮に筑波大生の県議選集団買収事件(地元出身候補に二百人近い学生が一票三千円で投票を依頼され、不在投票をした事件)が起きて、ジャーナリズムをざわしめたことがあったが、このような無節操な政治オンチを生み出した責任は、いさぎよい自主的な政治活動を封殺する学内管理体制にあるという批判がおそらく導火線となつて、一九七九年の秋、学園祭の自主運営を要求する学生が、それをあくまで拒否する大学当局にたいして造反し、白根公然と無許可集会やデモを連日くりひろげて学内は騒然となった。

事件は学生の処分ということで落着したが、このように、この大学では、造反の発端となった学園祭一つとってみても、学生の要求はいさぎよく認められないのみか、学園祭のあり方を批判する自由さえ許されない。奇妙なことに、「開かれた大学」の理念実現のために、学内はこうして「格子なき牢獄」のように閉ざされているのである、と著者はいう。すなわち、理念としての「開かれ



筑波移転を文字部が反対している東京教育大学で  
四四年七月四日評議会会ができた。全学闘学生  
の評議会粉砕デモを機動隊が排除。(一九六九年東  
京教育大学にて)

えられ、そして、従来の自治会にかわる学生組織として、金学生代表者会議というのが設けられている。大学の組織の中に学生組織が組みこまれて、学生の地位の一步前進だという見方もあるが、著者はそれにはたいして、現実には学生組織が大学管理の中に取り込まれ、骨抜きにされ、管理側にとって衛生無害な存在になりつつあると説いている。

さらに、学生の動向は「学内ケイサツ」(学生部)と「学内公安」(学担、すなわち学生担当教官室)によりつねに監視され、学内集會も地下活動なみに監視の目をくぐって行われ、スパイや私服もウロウロしているという。

第二章「筑波大学と研究学園都市」は、筑波大と研究学園都市との関係、その規模や施設、開発の経過、さらに周辺住民との関係を扱っている。いずれにしても、筑波大学は、たんに元の東京教育大学が筑波地区に統合移転したものだなんて思っていたら大間違いで、「移転をきっかけとして、日本のイデオ・ポリス、科学技術のメッカ、あるいは二十一世紀のモデル都市としての学園都市にふさわしい大学として、まったく新しい体制の大学に脱皮した」ことがよく分った。

首都圏整備計画の一環として、東京の人口過密解消と、科学技術研究機関の整備・統合を目的にした研究学園都市

はかったことである。この仕組みは、いうまでもなく大学の改革を求めて吹きあれた学園紛争に学んだものであり、たてまえとしては、筑波大学は、日本の大学の「閉鎖性」や「象牙の塔」的体質を打破するところであり、それがあくまでもこの大学を創設する大義名分となった。ただ、その改革が財界の意向と中教審路線に沿って行われたところから、できた大学は必然的にそういった性格を帯び、著者はそれを、よくいわれる「企業型大学」どころか、大学の企業化と攻撃する。そして続く第四章では、学長を頂点とする、トップ・マネージメント方式による集中管理システムを、学生と教員に対する強大な集中権力機構として論じている。

第五章「首領とその教官たち」は、物理学者出身の、悪名高い(一)実力者、新学長の福田繁之の言行とその人脈に割かれ、さらに終章「福田新学長と筑波大学の八〇年代」では、その学長選出のいきさつを語ったあと、全国の大学の「筑波化」に対して警告を発し、科学技術信仰仰のとりこになっているこの筑波大学の「解体」を予言して、この本は終わっている。

市開発は、まさに高度経済成長期における一大国家事業であって、それに注ぎこまれる金は、概成期となる一九七九年までに一兆三百億円に達する。成田新国際空港の建設費は、民間投資を含めて約六千億といわれるが、研究学園都市の開発は、それをはるかに上回るプロジェクトであり、筑波大学はその中核的存在なのである。大学のキャンパスは東大本郷キャンパスの五倍といえばそのスケールがよく分るだろう。

続いて、こういった開発が、元農耕地帯を捲きこんで実現してゆく過程などが述べられているが、ともあれ、筑波について論ずる時、基本的事実として大いに参考になると思う。

第三章は「産学協同の管理・運営・教育機構」、第四章は「筑波方式という独裁制」と題され、この両章で筑波大学の組織、方式、運営の実態をことごとくに扱っているが、その全面的な紹介は限られた紙面では不可能であり、また不必要とも思う——大要はあちこちで紹介されているから——ので、言及は最少限度にとどめよう。

筑波大学が従来のもので根本的に違うところは、(一)学部学科および講座制の解体による、教育と研究組織の分離、(二)教授会自治や学部中心の分権主義を否定し、トップ・マネージメント方式による管理運営の中央集権化を

これで、不十分なから、このルポの紹介の責は一応果たしたと思うが、以上からもこの本のねらいや調子は明らかであろう。著者の長須は、序章によれば、一九七九年初に東大自主講座「大学論」で、大学論を一席やったこともあり、それから察せられるように、いわゆる反体制あるいは新左翼の傾向の人物のようである。そしてこの本も、客観的なレポートというよりは、むしろ反体制の立場からする、筑波大学の「危険な体質」の告発である。

もちろん、いかなる思想信条を持つと、体制側につきこうと反対しようとする各人の自由だが、ただこの告発が、客観的にみて十分説得的であるかといえば、大いに疑問があるといわざるを得ない。

ここで、私が著者の尻馬に乗って、サルトルの「知識人は反体制的でなければならぬ」という、例の知識人論でも借りて、いかにも当世風の体制批判を一席ぶちでもしたら、大向うの喝采でも博することができのらうが、そんなことは冗談にも博するつもりはない。私はサルトルの知識人論を浅薄でつまらぬものと考えており(創元社「知識人・その虚像と実像」所収の拙論参照)、それにもっとも当世風の知識人として通用したいと思わぬからだ。

さて、この『筑波大学』の著者はきびしく筑波方式を批判し、最後にはその解体まで予言するという、派手な糾弾を行っているが、その批判の物差しは意外にあいまいで空疎であり、底が浅いように見受けられる。

大学紛争は、日本の大学の閉鎖性や独善性を白日の下にさらけ出したが、それを打破し、改革して「開かれたもの」とするところに、それ以後の大学の根本的な課題があったはずであり、それが筑波大学創設の大義名分でもあったことは、著者自身も認めている。だが、あれほど猫も杓子も口にした「大学改革」のたどった運命はどうであったか。東大紛争の十年後の今日、何も変らなかつたという意見の方が強いようである。あれほど燃えさかつた紛争も、結局はただの空騒ぎにすぎなかつたということなのか。

そのような現状からすれば、紛争の経験は早々と生かされ、新構想の大学を実現に移した国の構想力、実行力はそれ自体、高く評価されてしかるべきではないか。「筑波大学にはわれわれの方で見習うべき点がたくさんありますね。紛争当時、われわれ教師も学生もこうやってみたい」と思った大学改革のいろいろなものがある、あまくて実験されているわけ、われわれは筑波大学がうまくいくように後押しをしたいと思います」というのが、大学闘争で



1月18日午前7時4分、龍岡門から機動隊が車を進らね、銃々と東大に入る。構内は放水とガス弾、投石、火炎ビンで戦場さながら。(1969年東大にて)

学生たちに「つるし上げ」られた経験を持つ、芳賀徹・東大教養学部助教授の、筑波大学に触れての当時の発言だが、それがもとで学生に追求され、その時の感想を『筑波大学』で、ガンバレ! (『諸君』一九七四年十月号) という文章に書き、このルポにも引用されているが、ここにも参考までに載せておくことにしよう。「あの紛争中、学生側からもマスコミからも、閉鎖的な大学制度の垢として散々悪態をつかれたのが教授会と講座制であったことを、彼らはほとんど知らぬ気なので、その教授会が、筑波大学でもっと機能的な各種委員会に分れて動くようになっていくことを指して、彼らは『大学の自治』の侵害という。五人の副学長や外部からの十人の参与が置かれたことについても同様だ。彼らが思うあの無理はないかも知れない。かつてあれほどしくく大学の『閉鎖性』を攻撃し、その開放を主張した大新聞が、いまでは口をぬぐってケロリとして、この筑波方式のあげ足とりに汲々としているのだから」

「悪の巢窟のごとくいわれた講座制も筑波では学群・学類・学系という斬新な教育・研究の両組織に改変された。その成果を私などは固唾を呑んで期待している。紛争中から紛争後にかけて、われわれも延べ何百時間、何万枚の紙を無駄にして、同様の制度改革の案を練ったこと

か。あの空しさを思い起こせば、この筑波の貴重な実験が功を奏することこそ願わずにはいられない。そして冒險に對するマスコミや大学人の冷笑と足引張り、心底から義憤さえ覚えずにはいられなかつたのである。……」

以上の発言は、この本では、改革の遅々として進まないのに業を煮やした大学人の「さあまあろ!」的筑波礼賛として、新構想としての筑波大学を批判しながら、そのじつ、従来の大学の改革を何一つできない大学人の足もとを見た発言として、否定のにとらえられているが、何もそう色めかぬをかけて見ることはなからう。すでに述べたような状況にあって、筑波に新しい大学の可能性を見、それに期待をかけた一大学人の自然な気持ちとして、ごくすなおに共感できるのである。

従来の大学の欠陥と改革の必要を認め、右のような状況を知り、そして筑波でその改革に移されているのを承知しながら、長須はまるで、その改革を客観的に評価するのを恐れるかのように、改革の進行を直視するのを恐れるかのように、そこで議論をそれ以上発展させることを止めて、いきなり大学人の「危険な体質」を持ち出し、それによって一方的に断罪しようとする。そこに問題の短絡とスリカネがある。

それでは、かれの理想とする大学とはいかなるものな

のか。かれは告発に急で、自分の大学観を具体的にほどこにも述べていないが、「あとがき」で、ある教官が筑波大学の現状を「冬の時代」と表現したのにならって、「筑波大学に『春』がめぐってくるとするなら、それは国家や資本の教育統制をねらう『大学改革』と、真に『開かれた』大学をめざす人民の側からの『大学変革』のきびしい相克を通じてしか『春』を呼ぶことはできないであろう」と書いている。どうやらこの、「真に開かれた大学をめざす人民の側からの『大学変革』」とやらが、筆者の大学の理想像らしい。

要するに、かれは国家や資本を敵視していて、筑波の場合も、改革が国家主導であるのがどうもシヤクにさわって認めたくないのだ。「すなわち、筑波大学は真に『開かれた大学』への変革を怠った日本の大学の虚を突いたような恰好で建設された大学なのである」(傍点筆者と書いているところに、それがよくうかがえるのである。トンビに油揚をさらわれたように、国家に改革を先取りされて切齒扼腕というところか。

それにしても、「人民の側の、真に開かれた大学をめざす」といえば、一見いかにももっともらしいが、これだけではあまりにも漠然として正体不明で、要するにキヤッチ・フレイズ程度のものにすぎないようである。第たして、本当に、そんなにだらうか。「あとがき」によると、筆者は、執筆中に編集担当員と共に何度も筑波大学に足を運び、学生や教官と話を交え、彼らとともに、この大学のありようについて「悲憤慷慨」した、とある。「悲憤慷慨」しようとするのと一向にさしつかえないが、「アバタもえくば」、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」のたとえどおり、あんまり対象べつたりでは見るべきものも見えないだろう。

著者であるこのジャーナリストは、筑波大学から自転車車で往復できる土浦郊外に住み、「あとがき」によれば、一九七九年春から秋にかけて、取材のため大学を徘徊し、当局から「しばしばうさんくさい目でみられ、ときとして取材拒否、あるいは妨害につき当った」。そのような地の利と、直接の取材から得られた個々の事実には、いろいろ教えられるものがあったのは事実である。だが、それを除けば、われわれが本当に知りたこと——現代日本の研究・教育体制における、筑波大学の位置と意義、冒頭で触れた、大学をめぐる現状とのからみ、そしてこれからの展望など——、本質的なことについては、何の参考にもならないのである。

一、「人民」とはいったいどれのことを指すのか。

著者の考え方の根本には、国家や資本を単純に悪玉、人民を善玉、ないしは前者を加害者、後者を被害者と見たてて一時代前の左翼の公式的な考え方が、強く横たわっているようだ。だが、一昔前ならともかく、現代のよくな大衆社会で、「人民」が常に善玉であり、被害者であるかは、そう簡単にはいえないだろう。労働組合だって加害者となる世の中である。ここで、この問題に深入りするのを避けるが、ロッキードの被告人で、ジャーナリズムからや知識人からは総スカンをくくっている田中角栄は、疑いもなく国家や資本に影響を与えている実力者だ。また、隣中国で、毛沢東や四人組の手先となったか、十年間の不毛を招いたのは人民以外の人だ(だっただか)。もとより、「人民」を信仰するのは自由だが、その程度の素朴リアリズムで現代社会に対決しようとしてもうてい無理な話だろう。いずれにしろ、この本を読むと筑波では、学生は学校の管理体制によって骨抜きにされ、教師は教師で、体制によってがんじがらめにしばられてやる気をなくし、無気力におちいって、およそ「夢もチホもない」大学といった印象を抱かされるが、果

『筑波大学』は、上にみたようなしないで、大学の現状に関するレポートというよりは、むしろ大学を自分の反体制趣味のために利用したといった感さがあるが、それでは、この大学を現代の日本においてできるだけ客観的にとらえ、位置づけるにはどうしたらいいか。それは最初のこととわっておいたように、大学を職場とする人間ではあっても、大学問題の専門家ではない私にはおよそ手に余る仕事であり、適当な大学史の専門家や、大学の管理運営に詳しい人にまかせる他はないが、この稿を書くにあたって、にわか勉強のために読んだ「朝日ジャーナル」の、山住正己の文章が、短い訪問記ながら一つの参考になろう。

これはおさなりのレポートや、はじめから特定の立場で見ようとした文章ではなく、『筑波大学』で大きく取り上げられた大学生と当局の対立や、そこでもっぱら攻撃の対象となった許可制についても、公平に目くばりしようとする努力が感じられる。そして、最後に「東京教育大学の取りつぶしをとまった強引な新大学の創設はあまりに乱暴であった。日本でふたたびこういうやり方が



あってはならない」とはつきり釘をさしたうえで、「筑波山麓に、教育とは何かを問いつづけ、学際的な研究を進めて、開かれた大学がつくられることを期待したい」と述べて終わっているが、教育・研究体制に触れて、福田副学長(当時)の話の聞いたりしながら、現時点で早急に結論を出そうとはせず、「筑波の特徴と問題をいま全面的にとらえざることは難しい」(傍点筆者)と正直に書いているのは、実感には違ひなからうが、好感がもてる。さて、これで筑波問題を論ずる義務が一応果たしたことになるが、ここで、この機会に、一人の大学人としてもう少し自由に、大学に関する感想を綴ることを許されたい。

最近、私は中山茂『帝国大学の誕生——国際比較の中の東大』(中公新書)をきわめて興味深く読み、このはじめて科学史の立場から書かれた大学史から、重要な基本的事実をいろいろ教えられると同時に、日本の大学や学問について新しい展望を与えられた。そして、日本における近代的大学発足の事情が、いかに今の大学を規定しているか、いかにその影を、色濃く今の大学の上に落としているかということを感じたのである。中山は、その本の中で、西欧の大学への移植に触れて次のように書いている。

に論じたところでそれはおよそひとりよがりや非生産的な議論であり、問題を解決するどころか混乱させるくらいがおちである。

ところで、日本の大学は開国を背景として誕生し、百年ほどの歴史を数える。戦前は一ますおくとし、戦後の大学をめぐる状況は、本質的にどういう性質のものであったのだろうか。

「はじめに」で言及した座談会で、永井元文相は「高度経済成長を日本人が一生懸命やってきた時期は、ある意味で非常に戦前の日本に似て」と、きわめて興味ある指摘をしている。戦前、たいへん強力な軍事国家をつくったように、戦後は高度経済成長をやったのけた。しかし、その間、社会保障や社会福祉、あるいは環境問題、そしてそれらほとんど同列に大学の問題は非常に軽視された。「その証拠に、中教審の計画は七一年になって初めて出たわけで、それ以前には何もない。」

このように、六〇年代の高度経済成長のころには大学政策、教育政策といったものがほぼ不在に近い状態であった。そこへ高度成長が押し寄せ、同時に大学も急激に膨張し、急速に大衆化していく。

当時、私は大阪の郊外に住んでいたが、私鉄の沿線の田畑が急速に取りこわされ、都市計画なゼクソ食らえと

こうした国際環境のなかで大学づくりをはじめる明治日本としては、ではまっすぐドイツ大学モデルを輸入したかという、そうかんたんにはゆかない。

一般に片々たる学術情報や技術的知識ならばその発生源である西欧の文化からはなして、そのまま日本のような異なった文化的環境に移植することも不可能ではない。しかし、そうした知識を産み、伝承するため、大学という制度をそっくりそのまま移植することは、まず不可能に近い。それは、大学という世俗的機関が、政府、学生、教師などその土地に固有なさまざまなグループの利害のひしめくところであり、一因あるいは一地域の文化的伝統に根深く結びつけられて棲息しているからである。ある意味では、大学は文化そのもの、といえる。そしてそれはまた制度としては複雑な一つのシステムをなしていて、要素分析してかんたんに採長補短ができるようなしろものではない。(傍点筆者)

この文章は、外国の大学はもろんのこと、自国の大学でも正確な姿を捉えるには、それなりの予備知識や視野が、いかえれば知的にかなり成熟した目が必要であることを示している。そうした前提抜きで、多様で複雑な現実の一面だけを抜きだして、自分に都合のいいよう



7学部集合の問答は一応平静に進められたが、ときに集会に反対する全共闘派が激しくデモする場面もあり、外では149人が逮捕された。(1969年東大闘争)

ばかりに、野放しに宅地化され、そこに、それこそ「ウサギ小屋」のようなアパートや文化住宅が立ち並んで行くのを通動の電車の窓から眺めながら、そういう事態に対して何の対策も打とうとしない行政当局にたいして不信の念に駆られたことをおぼえているが、今考えてみると、都市政策などどこにも存在しなかったのだ。

そして、日本の大学、とくに私大の高度成長、急激な膨張は、まさしく都市化の舞台同様、野放しで無計画であった。これでは混乱が起きるのは当然で、起さない方がふしぎだろう。事実、混乱は起きていて、われわれは受験競争、医大の裏口入学、慶応につく早稲田の不正入試、大学のレジャーセンター化、教員の側では研究論文の質の低下等々につき合わされている。永井元文相はこの点をとらえて「社会主義国、自由主義国を含めた先進工業国の中の特殊日本の現象」として認識する必要がある、といっているが、たしかに、この現象の確認を抜きにして、いかに立派な改革の理想をかかげようと、いかに「悲憤慷慨」して体制の非を鳴らそうと、要するに根なし草に終るだけだろう。

この問題に関連して、われわれの学会（日本フランス語フランス文学会）の今年の春季大会でのシンポジウムのことを、ここでぜひ報告しておきたいという気がする。

そういった状態を、ここで一べん整理して、何が必要であり、何が必要でないかを見分ける必要があるのではないか。これは、放送大学の出現によって験がおびやかされるということとは別のことで、そういった作業を怠ってれば、強力な改革案をつきつけられた場合、本当にそれに対抗することがむづかしいのではないか。

ざっと以上が尾形教授の発言だったが、タテマ論や実務的な話のあとで、ひどく生々しい実感があつた。そして、私はこの指摘があのシンポジウムの最大の収穫ではなかったかと考えている。

尾形発言は、さきの永井説と同様、<sup>※</sup>特殊日本の現象の確認を迫るものだが、最近、やはり「朝日ジャーナル」に発表された、日本の大学に勤務する外人教師にたいする、日本の大学に関するアンケートに寄せられたきびしい回答を見ても、それは国際的に確認されているといつてよいだろう。そして、それが戦後新制大学の帰結であり、好むと好まざるにかかわらず——科学史家中山講師のこぼしを借りれば——「ある意味で、われわれの文化そのもの」だったのである。

日本の戦後の大学をめぐる状況について、若干論じてきたが、いずれにしろ、他の文化領域と同様、大学でも現在ほど空虚なタテマではなくて、足元の現実から出

何年か前から、フランス語教育をめぐってシンポジウムが開かれていたが、今年のテーマは「放送大学と語学教育」というテーマであった。

内容はNHKで構想中の「放送大学」における語学放送と、既成の大学での語学教育との関係をめぐるものである。私ははじめから聞き通したわけではなく、中途から出席したが、放送大学に否定的な（といふことは、結局、既成の大学でのあり方を擁護する）講演と、NHKで実際に放送にたずさわっている教員の、どちらかといえば実務に即した話が若干の質疑をまじえて終わったあと、最後のまとめに入った時に、講師として出席していた、先の座談会にも名前を出していた尾形憲教授（教育経済学）が多少いり立った調子で、大要次のように発言したのが非常に印象的であった。

高度成長以来、日本の大学、ことに私学は膨張を続けてきた。だが、それはべつに独占資本の要求や国民の要求なんかでそうなったわけではなく——独占資本が経済学部をどんどんつくれといったわけでもなく、国民が経済学や社会科学を勉強したいと要求したわけでもない——、私学の場合、マイクと大教室があれば経営がなり立つという観点から、こんなふうに上ったのだ。そして自分もそのおかげで食っているという現実がある。

発する必要に迫られている時はないようである。

ところで、「特殊日本の現象」はそれまでとして、あるべき本来の大学というものを考える時、私にはいつも脳裏に浮かぶことがあつた。それは、日本でも知られている歴史家・フラン・パークがオックスフォード大学副総長を引退するのを機会に、「オブザーバー」紙がこたったインタビュー（一九七四年）がそれである。私が読んだのはその抄訳にすぎないが、その短いやりとりからも、イギリスと日本の違いを越えて、現代の大学のあるべき方向が指示されていると——少くとも私には——思えるのである。

大学批判に関する質問に答えて、パークは、十八歳以後の高等教育にたいする関心の高まりについて、できるだけ多くの青年たちが一八歳以後も、もし望むなら教育を続けるべきだということには賛成だとしながら、高等教育というものと大学教育というものとを区別して考えることが重要だとする。そして高等教育や大学教育の多様化の必要を説いているが、にもかかわらず、高等教育の中にあつて、大学教育は他と異なる独自のものであり、今後ともそうあり続けるべきだといふ。「高等教育を現在より多くの青年たちが受けるということに私は賛成だが、だからといってその目的を達成するために大学が

犠牲になり、その独自の性格が水に流されてしまおうのには反対だ。

それでは、現代社会にあって、大学のもつアイデンティティーは何か。その質問にたいして、パロックは次のようにいう。

そう、オックスフォードにおけるわれわれの考えは——他の大学にも同様の考えの人はたくさんいるが——大学の任務は何か特定の仕事あるいは職業に合うように学生を訓練することではなく、特殊知識をつめこんだり、職業教育を与えたりすることではない、というものだ。では何が任務かという、学生を教育する——すなわち何にでも彼らの興味をそその科目において彼らのもっている思索の力と創造力を引き出すこと、彼らをはげまし、通常の知恵の表面をつき破って深く問題をさぐり、単一の単純な解答などない問題と格闘するようにし向けること、自らの知識の限界を悟らせること（自らの無知を知り、真の知識の何たるかを学ぶことは教育の非常に重要な部分である）、そして大学の外の世界の問題に直面した時にもくじけない自信をつけさせてやること——である。

もちろんこれは理想であって、世の他の制度と同じれわれはこの種の圧力をかけてもらう必要さえある——そもそもわれわれの仕事に価値があるのだろうかというのを彼らが疑っているようにみえたことである。

従って、私は、大学が自ら考える大学教育と研究の価値をはっきりさせるべきだと思う。そして黙っていることによつて、その立場——自らの住む社会に関心をもちつものならだれにとっても重要なものだと思うが——を欠席裁判によつて裁かれるようなことがあつてはならない。

引用が少し長くなったが、以上がパロックの大学論の骨子である。どこかの国の知識人のように、体制がどうの、こうのといった派手な表現は一さいせず、むしろふつうのことばを用いてたんと語っているが、内容には、見掛けをはるかに超えた厚みがあり、きびしさがある。

そこには、成熟した判断や人間観、一口にいって成熟した知性、真の良識が豊かに感じられるが、それはパロック個人のものであると同時に、長い歴史と伝統をほこるイギリスの大学や知性の賜物でもあるのだろう。

パロックの意見は、日本での、こういった場合の議論とはかなりかけ離れているように感じられる。（だからこ

く必ずしも完全に実現されているわけではない。だが、目標を少くともしっかり見守り見守りしておくことはたいせつだ。

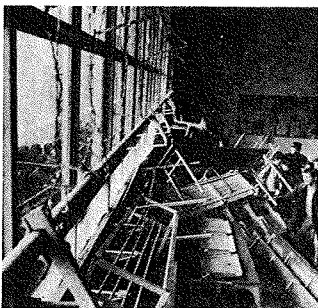
もう一度くり返しておきたいが、いまいったような型の教育は、一八歳以後も教育を続けたいと欲するすべでの人に適しているとはいえない。七、五万人もの青年たちがアカデミックな教育を欲しもしないのに、詰り、水まじしたような形で、一知半解のインテリに、つり上げられるようなことは、できれば見たくない、と私は思う。（傍点筆者）

さらに、「今日の大学に対する期待」について、大学および大学教育が国に対してもつ価値は、生産性だとかその他の管理的表現では計れないものだと思う、と述べているが、しかし次のように続けている。

しかし同時に、私は大学があぐらをかいて社会に理解されるのは当り前だという顔をしているのは間違いだと考えている。私が、関係や当局者と話していて本当に悲しく思ったのは、人々が、大学に対してもっと効率よく仕事をしたらどうかと圧力をかけたことではなくて——これはまったく正当な批判だと思うし、わ

そ、大学がこんなにもちやくちやくに膨れ上がったのだ。そこに日本の知的風土の特性、日本の知性の未熟さや脆弱さ、人間観の底の浅さなどが感じられてならないが、それについて論ずるのはまたべつの機会にゆずって、私は、日本で人気があるうが、少なくとも基本的にはパロックのいうところが大学の原点があり、それ以外は疑似大学であり、大学、ここにすぎないことを確信していることを付け加えて、このささやかな大学論を終ることにする。

（仏文学教授・まるおけん）



学内「社会学会」の運営参加など6項目を学生が要求、社会側のストが統一半封鎖された社会学会。(1969年開大にて)

## 『時計じかけのオレンジ』についてのノート

アントニー・パージエス選集②（竜信一郎訳、早川書房、一、五〇〇円）

荒木倫子

いつの時代にも、人間とは、若い活力にあふれたある一時期において、理解されないが故の苦悩を、大人たちの言う理由なき反抗に訴えたり、ほとぼり出るエネルギーのはげけ口を暴力に求めたりするものなのかもしれない。そして、いつの日か青春という原を後ろ手に閉めた時、人はもう別人になってしまっている。青春は背後に過ぎ去り、人は大人の仲間入りをしているのである。『時計じかけのオレンジ』も、やはりそんな時期にある少年アレックスの十五歳から十七歳までを、彼自身の、盛んに隠語の飛び出す語りで綴った小説である。と書いてくれば、それは、何かすこぶる感傷的で甘美な青春時

代の追想的告白かそういう類を連想させるだろうか。けれども、事実は全く違う。それは、自己と社会への底抜けにドライで残酷は素破抜きであり、全体を通じてアレックスのカラカラという笑い声がこだましているようである。

時代は、人間が月へ旅行をし、テレビでは世界放送をするという未来。その頃、英国には「子供か、子供を持っているもの、病氣のもの以外は、誰でもすべて働きに出なければならぬという法律」(45ページ)が制定されている。従って、状況としては、あの自由主義国は社会主義国へと移行していると思われることができる。

そこで、この未来社会におけるアレックスの青春とは何如なるものなのか。彼は、三人の仲間と共に夜の巷を徘徊しては、通りすがりの無力な老人をこっそり酷めつけ、店に押し入っては、無間矢鱈と派手な破壊行為をやる。そして、車をシグザグ運転させたり、猛スピードで突っ走っては、進行を阻む者を容赦なく轢き跳ばし、ドライウの手土産には、郊外の民家を襲って主婦に恐ろしい暴行を働く。これらは、衝動の極致、暴力のための暴力、暴力至上主義の謳歌等々、何と名付けられようとも名付け足りない行為に相違ない。そんなわけで、アレックスはそれを「超暴力」と呼ぶのである。

畳み掛けるように展開されるこのショックングな一連の行動は、実生活で度々報道される若者たちの過激な暴走に対する我々の生の反発と無意識の内に相まって、我々に極度な嫌悪感を抱かせるか、あるいは、極悪非道な行為に対する我々の先天的拒否感を麻痺させるか、何かそのような鋭い衝撃を与えるだろう。しかしながらたとえそうであっても、アレックスというこの超不良少年を決して憎めないような気がし、それどころか何か爽かさ、小気味良さを後味として感じさせられるのを、我々は認められないだろうか。とすると、一体それは何故な

作品中に、アレックスと同名で『時計じかけのオレンジ』という小説を書いているF・アレキサンダーという作家が登場する。オールドス・ハックスレーは、「恋愛対位法」において、作中に自己の分身である作家が登場させて小説について語らせているが、このF・アレキサンダーの場合も同様のことが言えるだろう。すなわち、F・アレキサンダーは、原作者A・パージエスを代弁しているのと見ることが出来る。その、F・アレキサンダーの小説を、アレックスはある切っ掛けで読むことになるのであるが、彼はその内容を次のように要約する。

……どうやら本の中でいつてらるらしいことは、このゴロリ、ユー・デイがみんな機械にされちゃって、ほんととは：みなさんもおれも、あの人もその他誰でも……ちょうど果物みたいなもんで、自然の産物なんだ、ということらしい。

F・アレキサンダーの考えでは、おれたちは、ポッドとか神によって植えられた世界果樹園の中のこの人という世界の木になつていてるようなものであつて、そこにおれたちがなつていてるというのは、ポッドとか神がその愛のかわきをいやすためにおれたちが必要なんだということらしい。(38)

これは、既成の社会そしてそこにおける人間の状況に



荒れそうな空模様

対するF・アレキサンダーの認識であり、諷刺である。彼によれば、元來人間は神の創造し給うたオレンジの奥であったが、今や、その自然の生命は枯渇してしまい、ただの時計じかけのオレンジと化してしまつたといふのである。つまり、社会は国家統制の元に高度に管理化されていき、その中にあって人間は整然とした社会機構の中に容赦なく組み込まれ、規則正しく配置される。そして人間はその生き生きと潤った人間らしさを剝奪され、どこもない機械じかけとなり、一つの型にはめ込まれて画一化されていく。人間は個性を失い、すべて同一色に塗りつぶされる。このF・アレキサンダーの認識が、出てくるのは、かなり終わりに近くなつてからであるが、それ以前の部分の教箇所を散らばつた「時計じかけのオレンジ」といふ言葉によつて、我々はこれが彼の社会に対する評価の伏線になつていふことに暗黙の内に気づくのである。

次に、アレックスの、世の中に対する見方であると思われる箇所を引用してみよう。

「彼らが何がいったい不良の『原因』かなんて考えこんでるのはおれにいわせりや、まったく可笑いだ。

『善良』の原因さえよくわかつていないくせに、その反対のことがわかるわけがないだろう？ 人々が

善良だということが、その人々が善良を好むということだとすると、おれは絶対その楽しみを妨害しようなどとは思わないし、また同じことが反対側の場合にも言える。そして、おれはその反対側を支持しているのだ。その上、不良は自己のことであり、個であり、君でありおれであり、われわれ孤獨なるものであつて、その自己なるものはボク、つまり神に、より作られたものであつて、その神の大きな誇りで、またラドニーでもあるのだ。だが、非自己は不良であり得ない、ということとは、彼ら政府とか裁判官とか学校とかは自己を認めることができなから、不良を認めることができない。(50)

これには、先に引用したF・アレキサンダーの考え方と響き合う所がある。そればかりでなく表現上の符合が見られるのは注目し得る(引用文中、傍点筆者)——F・アレキサンダーの「オレンジ」を使つた比喩的表現はアレックスでは「自己」といふ語が使用されて直接的な表現になつていふのがわかる。

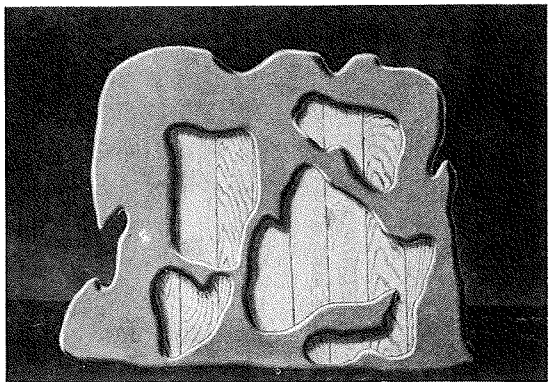
アレックスはこの中で、何故に自分が不良であるのか——いわば「不良『自己』」の等式が成り立つこと——を舌足らずな語りで説明している。彼の考えでは、善の原因とは人々が善良を「好む」といふことにある。換言す

れば、それは、自らの意志に従つて為される善が、真の善であるということの意味している。つまり善とは、それを「好む」といふ精神の積極的な作用に裏打ちされたものであるといふのである。ここで読者は狐につままれたような気持ちになるかもしれない。なぜならアレックスの言つていふことは、当り前のことだからだ。しかしながら、彼の住む世界——F・アレキサンダーが言うように、人間はすべて「機械」にざれてしまつた世界——では、それは当り前ではないのである。アレックスの「彼ら政府とか裁判官とか学校とかは自己を認めることができなから」といふ言葉が、それを如実に示している。自己とは、意志を有し、それ自体自由で独立した存在であるが、それがこの世界では、意志を抜かれた「非自己」すなわち時計じかけのオレンジにざれてしまつたのである。従つて、当然善も不在となる。あつてもそれは管理下での善にすぎない。だからアレックスが、善の原因をわざわざ云々するのも納得がいくだろう。

A・バージェスは、第一部の「超暴力」に続く第二部で、アレックス自身を正に標本とも言える見事で極端な時計じかけのオレンジにしてしまふ。それによつて、作者は、アレックスの「不良『自己』」の等式に根拠を与えようとしていふと思われる。それで、第二部を検討して

から、その等式を解釈したい。

第二部においては、超暴力に明け暮れていたアレックスも、ついに年貢の納め時が来たのか、殺人罪で十四年の懲役を食らう。しかし獄舎でも彼は囚人仲間と相も変わらず渡り合っていた。そんな時ひょんなことから政府の命令した、悪を善に変えるという犯罪者教化法の被験者第一号に抜擢される。アレックスが適用された実験とは、いわゆる条件反射の応用である。手足を動かすことも目を閉じることも禁止された状態で、数々のおぞましい超暴力の映画を見せられては、予め打たれたルドピコ剤の作用で激しい吐き気を催す。この実験が二週間続く、拒絶は、絶対に許されない。そして二週間の後には、暴力とくれば反射的に吐き気が生じてくるに至る。従って、超暴力どころか、たかがハエ一匹を殺そうと考えただけでも吐き気という肉体的苦痛が襲ってくるようになるのである。となると、吐き気への嫌悪感故に、もはやどんな小さな暴力の兆しもアレックスからは消え去り、まして超暴力などは、なおさらはるか彼方へおさらばという次第になる。アレックスも今後は真人間になって、再出発するだろう。もう決して、悪の道へは踏み込まずひたすら善を尽くそうとするだろう。教化法万歳！アレックス万歳！



邪悪なデモン

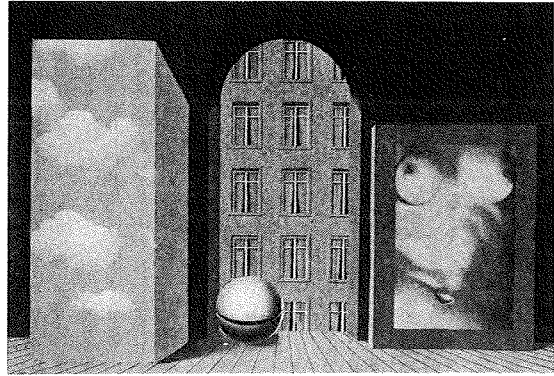
しかしながら、アレックスにこの教化法が適用される直前に、刑務所の教誨師が言った「善良になるということはそれほどすてきなことではあるまいよ、六六五五三二二君、善良になるということは、ぞつとするようないやなことかもしれない。」(12) という暗示的忠告が、次に掲げる実験者の言葉で明瞭な意味を帯びてくることにより、ありがたい教化法は、その実体を暴露する。

ごらんの通り、われわれの実験患者は、悪の方へ無理に押しやられることによって、逆説的に、善の方へ押しやられるわけなのです。暴行の意図を抱けば、肉体的に強烈な苦痛の感じを伴うことになっていくのです。その苦痛を避けるために、患者はまったく反対の姿勢を取らざるを得ないわけです(13)。なる程、アレックスは悪から善へと転換したと言い得る。しかし消極的な見方をすれば、彼にできることは、神経組織に巧妙に細工された条件反射によって生ずる激しい嘔吐感が目を覚まさないように気を配ることだけである。彼は四六時中善のことばかり考えていなければならぬ。例えば、美女に對するアレックスの欲望は、中世の騎士的態度へと滑稽な程に極端に変貌するのであるが、この悪から善への転換は、背後から吐き気が脅迫するからに他ならない。教誨師が言うように、彼には倫理道德的選

択権はない。とすると、果してこの善は本当の善か。それは人の意志を無視して強制されたいわば擬似善ではないのか。

では、善が暴力に手助けされる場合、例えば、正当防衛的態度を取る必要性が生じた時にはどうなるのか。正当防衛をしようものなら途端に吐き気を催すのだから、それを回避するためには、何もしないでこそこそと逃げ出すか、相手の暴力を甘んじて受けねばならないのである。だから、今や警察官となった昔の不良仲間や、以前暴行された老人たちが復讐とばかりに向かってくるのに対し、アレックスは何ら方策を知らない。とすると、ここで奇妙な現象が起っていることになる。この時、自分の意志に従って善を行なおうとすることは、すなわち悪を行なうことを意味し、政府が彼に与えた善がいわゆる善として認められることになる。そうすると、アレックスは、与えられた善という仮面をかぶることにより「真の罪悪」(14)をしていくことになるのだ。これが擬似善でなくして何であるうか。

ここで、先程のアレックスの認識に戻ろう。この未来社会では、心の自由を奪われたアレックスのように統制されて非自己化した人々は、当然擬似善に埋没してしまっていると見てよい。彼らはその世界に余りに慣れ過ぎ



暴力行為

たため、それが自然なことだと思っている。だから彼らが善の原因も知らないくせに「不良」の原因を云々することは、教化法を受ける以前のアレックスにとっては、「こんなこと、おれにいわせりや、ちゃんちゃらおかしくてグルービー」(51)ということになる。そんな社会の中で、たとえ疎外されようとも、それでも自己であり続け、自己に忠実に生きようとするためには、自己由来するものを採らねばならない。アレックスは、善も不良も自己に由来するものとして互角に評価する。そして結局彼が彼なりに自己の在り方として猛然と志向するのは「不良」なのである。だから彼は「おれがやっていることは、やっつてることが好きだからやっているんだ」(傍点筆者)と堂々と言えるのである。普通の意味でなら、これはさしつめ居直りというところだが、この未来社会においては、それは真正直な生き方を極めて素材に言い表わした言葉となる。そして、これは自然の中で、神のオレンジとしてのみずみずしい自己から出た言葉だとも言える。こうして、アレックスの「不良」「自己」の等式は証明されるのである。そして、この等式こそが、アレックスを超暴力へと駆り立てて、巨大な社会機構に対する抵抗を生み出させる原動力となるのである。

この社会における、自己を非自己化するという非人間

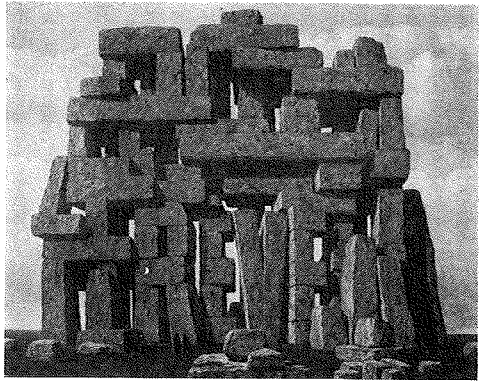
的な行為と比べれば、アレックスの超暴力などは無に等しいのではないか。むしろ自己を非自己化することの方が超暴力であり、おまけに無数の「超」が添加されてもまだ足りない位ではないか。作者は、この作品の中で、見える事柄——超暴力と、見えない事柄——社会の仕組み、換言すると、現実の社会では絶対に受け入れられない管のないものと、何の懐疑心も抱かされずに習慣として表面に受け入れられているものを対峙させる。そして、作品が進捗するにつれて、前者における悪性は漸次的に薄められていき、逆に本質を見せないため中性のように見える後者の悪性が暴露されていく。それによって、前者に対して自然に生じる我々の即時的な反感は、結果的には、後者へと百八十度方向転換させられる。実際には悪としか言いようのない超暴力が、ここでは自由意志を有する自己という濾紙を通り抜けることによってポジティブな意味を帯びてくる。つまりアレックスの超暴力とは、自己の象徴として顕示されてくる。直ちに視覚に訴えかけてくる極悪さと仮面をかぶった悪の、この逆転こそが、アレックスに対する爽かさ、小気味良さを我々に抱かせる要因なのだと言える。

第三部の後半で起きるアレックスの自己の蘇生と超暴力再開の兆しは、正に彼の勝利を意味する。と同時に、

それは、自己の尊厳性への作者の再度の強調である。この特殊な未来社会に住むアレックスは、彼のやり方で、社会機構の統制下になんか自己を追求していった。彼は、非自己としてではなく自己として、時計計かけのオレンジではなくオレンジとして精いっぱい生きようと努力したのである。

しかしながら、冒頭でも述べたように、青春を通り越した時、人は人生との妥協の中で別人となる。若い頃、あれ程熱烈に燃えていた火はいつの間に消え、人はその燃え残りを記憶というつぼの中にぞんざいに放り込む(——)というのは、大人になった時、人は若さを見くびるからとアレックスも例外ではなく「若さは過ぎ去るべきものだ」(48)と言って超暴力から足を洗い、結婚のことを考え始める。平和で幸福そうな幕切れではあるが、それが実は、裏腹にまた別の意味での非自己化へあること、アレックス自身気づいているのかもしれない。「ああ、地獄へ行くんが、地獄」(49)という彼の言葉は、そのことを傍証してはいないだろうか。

A・パージェスは、映画化された本作品が、アレックスの超暴力からの改心を含んでおらず、暴力の繰り返される暗示があることに不満を抱いている反面、この改心



會話の術

の最終章を削除した版の発行を許しているということである。この矛盾の裏には、今述べたような「自己」のままか、人生における避け難いある意味での「非自己」化かというジレンマが存在しているのではないかと。私としては、改心の章では安心もしたが、反面がっかりもした付け加えれば、この感情のアンビヴァレンスは、アラン・シリトーの『土曜の夜と日曜の朝』のクライマックスで経験されるものと共通のものである。

『時計計しかけのオレンジ』は、その中に様々な諷刺や皮肉を折り込みながら、見える「悪」と見える「悪」における見事なパラドックスを展開させることにより、現代にも通じる社会——いや、現代を極端に歪曲した社会と言った方が適切かもしれない——を鋭く批判した作品である。予言であるとは言いたくない。そして、アレックスは、一種のピカロと考えられる。とすると、英国のピカレスク・ノヴェルは、舞台を未来に置いた小説を得て、今なお健在であると言えよう。(一九八〇、七)

(大学院文学研究科・あらき みちこ)

## 差別落書問題をめぐって ②

田 宮 武

落書は楽書か 差別落書についての共通討議資料を

材料にして、共同討議をしていると、落書一般にまで話題が広がっていく時がある。たとえば、落書は反体制的な性格をもつものであるとか、落書は権力者の抑圧に対する民衆の反抗の現われであるとか、全体的にみて、落書のもつ社会的意味を肯定的に評価するような意見が出てくる。あるいは、ある種の落書が差別になるといって罪悪視する考え方に賛同できないのか、落書というと思えば「いたすら」程度のことというイメージに左右されるのか、いずれにせよ、落書をそれほど重大な差別問題としてとらえる必要があるのかと、疑問視する声が出

てくることもある。

差別落書の問題を落書一般の話に解消していくと、その社会的意味を正しくとらえることにはならないだろうが、差別落書を「落書とは何か」というより広い文脈で考えいく必要性もあるだろうと思う。これまで落書についてどんな考え方が、とらえ方が発表されているのかをめぐって、読んだ落書関係の参考文献、といっても研究書から雑本の類までの内容をしばらく紹介してみよう。まず、読んだ参考文献(単行本)は次のとおり。

李家正文『らくがき史』実業の日本社、一九五〇年。  
李家正文『らくがき昭和史』河出書房、一九五六年。



田口寛治「らくがき大学生―答案らくがき十余年―」  
講談社(ミリオン・ブックス)、一九六一年。

河原淳「らくがき行動学―生活を豊かにする自己表現―」  
産報、一九七一年。

土山忠滋「トイレの落書き―密室のボルノ作家・芸術家たち―」  
土屋書店、一九七八年。

ロバート・ライズナー 鈴木重吉・片山厚訳『落書きの世界』時事通信社、一九七七年。

ほかにも、まだまだ参考文獻はあるようで、特に李家正文という人は朝日新聞記者で、廁(かわや)の研究で文学博士号をとったとも聞いたが、『らくがき文化史』(講談社)等の本をまとめているそうである。またそういうえぼと思ひ起こしてみると、フランスかアメリカの学生運動の学生たちが街頭の、学舎の壁に書きつけた落書きを集めた『壁は語る』( )とかいった翻訳も出ていたような記憶もあるが、今のところ何もはっきりとわからない。

どの本も、落書の文化史的意義や社会的効用を肯定的に評価した上で、落書として残されているものの中に文化的価値を見出しようとしたり、落書をするこのような落書上の楽しさを推察したりする内容である。そのような落書に対する考え方は、先の『落書きの世界』のオビに書かれた短文に集約されているように思われる。「落書き

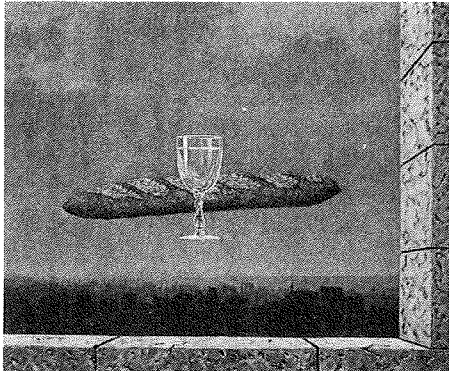
記憶がある。また、小学高学年の次男に「なんか落書の本をみたことないか」と落書のすすめみたいなことを解説した子ども向きの本でもあるのではないかと思つてたずねると、「落書なんかなんぼでも書いてやるよ」という返事もどつてくる。落書には、書く者が楽しみながら書きつけるといった性格を本来もっているようだ。落書は楽書の性格をもっている。

先の『らくがき史』は欧米、東洋と日本の大和時代から明治時代までの落書をエピソードで綴った読み物風の研究書であるが、その最後の「総説篇」は落書の分析を行っている。それによると、落書(らくがき)に関する名称として、おとしぶみ(落文)、らくしよ(落書)、らくしゆ(落首)、らくがき(落書)、へきしよ(壁書)等をあけて辞典を引用しながら説明を加えている。それによると、「らくがきは最初自分自身の戯れとして古代人の間に発生した。これがいま楽書きと文字に書かれる楽しみ書きに相当する。らくがきは自分のことを人に訴えたり他人や社会の事件をとりあげたとき、そこにはある目的をもって声の重唱(わさうた)が撒布され、あるときは絵や文字となって巻間に落とされた。これが落とす文すなわち落書(らくしよ)である。この落書は、署名であることもあるがその性質上多くは名が匿され、いわゆる匿名の書

は、とついで反逆にみちみちていても、なぜか哀しい。大胆なセックス、為政者などへの抵抗、くすぐりと冷笑、皮肉たっぷりなあてこすり……、欧米各地のトイレや街角などから広く集めた珍奇・秀抜な落書き考、それらは歴史と人種を超えた庶民の心のぞきメカナだ。―傑作集つき―とある。

イラストレーターの河原淳の『らくがき行動学』の宣伝文によると、らくがきをどしどしやろう、それが自己表現になると、「落書のすすめ」を提唱している。「言いたいことを言ってみよう。やりたいことをやってみよう。それが自由というものだ。古い「カラ」を解き放ち、街に出よう。ペンを持ち、言葉をしるし、色を塗ろう。らくがき魂は、自由の魂なのだ。トイレのらくがき、公園のらくがき、リクエストカード、ポディー・ペインティングなど街にあふれる情報、著者の人生観をまじえながら軽快にコメントする痛快無比の書」といい、その第一章を「らくがき人生は楽しい」という見出しで書き始めている。

自分の子ども時代を振りかえつて、落書のことを思い出してみると、教科書の余白に飛行機なんかを少しずつ上下をずらして書いて、ページをバラバラとすばやくくつていくと、空中戦を演じているように見えて楽しんだ



物の力

であった。落書には、いろいろな形式があるが、殊に歌謡形式のものは落首といわれ、戯歌の落書をいっている。その言葉の意味はおそらく落書の歌何首の意であろう。

〔同書 四一—一四二ページ〕と、落書の定義としている。

また、「らくがき」の語義として、七種類の辞典の説明を紹介しているが、その中から一、二を紹介すると、  
〔大日本百科大辞典〕 らくがき、落書案書といふは落書より脱化したるものならんも、少しく其性質を異にし、戯れに門又は壁などにいたづら事を書きつくるをいふ、主に小供のなすことも、亦然らざる場合あり

〔大日本国語辞典〕 落書、案書、落書(らくし)の転、門又は壁などにいたづら書きをすること又其の書画とある。

このような落書についての考え方、とらえ方が社会的に存在していて、部落差別、民族差別、女性差別、障害者差別の落書に対してまでも、そうした角度からみてしまつて、それほど目くしらを立てる必要がないではないかといった、おおらかな寛容の気持で接しているのではないだろうか。落書には、戯れに書きつける者にとつては冗談半分、面白半分、風刺と多分に嘲笑とをきかせて書いたつもりでも、書かれた者にとつては、侮辱であり、罵詈雑言であり、差別の凶器になる場合も往々にし

てみられる。差別落書の類である。

民衆の心のぞきメカネ 滋賀県の草津線に三雲という駅があって、そのすぐ南側の小高い丘の上に「天保義民之碑」という大石碑が立っているのを、電車の窓からでも見える。一八四二年(天保一三年)一〇月近くの野洲川に一万数千人とも二万人ともいわれる農民が結集して、幕府の役人の市野茂三郎に対して、「検地十万日延」を承認させよという農民一揆を起こしたという。この一揆で、農民の要求は通ったが、指導者約六〇人が処刑されたのをむらうために石碑は建てられたものである。

平井清隆さんという部落史の研究者が滋賀県の被差別部落めぐりをする中で老人たちから聞いた民話や伝説をまとめた本を出している。『近江大衆の伝説民話』(京都・サンブライト出版部)という本で、ちようど一〇〇語を紹介しているが、その一つに「天保義民と落首」がある。そこに、記録として残っている落書を五つ取りあげて、その意味を解説している。二つの落首を紹介すると、  
茂三どののきらいは尾張大根と  
彦根カラに陸奥のうおなり

聞いて三井 人をぶらりと釣鐘の

ごうもんごうもん やかましい沙汰(さた)

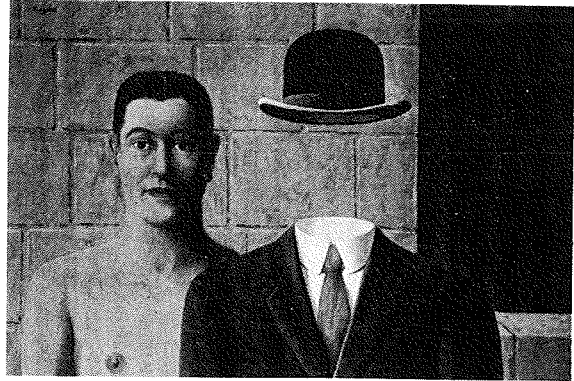
これだけ読んでよく分からないので、解説をみると、前者の落首は次のように解釈されている。「これは、徳川尾張公と井伊彦根公、それに松平陸奥公の三つの藩の領地だけは、殿さまが恐ろしいので、ちっとも検地をしないで、弱い小さい藩の領地だけ手きびしく検地して、米をたくさん取り上げる算段をしています。そんな幕府の役人市野茂三郎を皮肉ったもので、ちっとも検地をしないのは弱く、下には強いものであることを、手きびしく決めつけたため、尾張は大根、彦根はカラの産地、陸奥は淡水魚の「ムツ」のことで、巧みに詠んで、急所を突いています」(同書 一四一—一四二ページ)と。

また後者の落首は、「天保の義民を何百人も三井寺の下に設けられた牢屋にとじ込め、拷問にかけた有様を、三井寺の鐘の「ゴオン」というひびきになぞらえて詠んだもので、幕府のやり方に対する非難の声をうかがうことができるだろう。このような落首には匿名の庶民が政治権力者に対していただいた風刺、あるいは嘲弄の意図がこめられている。

自分が担当している放送論の一年間の授業を振り返らせてみると、落書についてはほんの少しだけれどもふれる箇所がいくつかある。それは、一九六九年一月一八日から

一九日にかけて起こった東京大学の安田講堂「落城」事件についてのテレビ中継のあり方を考えるさいに、学生運動家が安田講堂の中に書き残した種々な落書がひとつの要点になるのである。回りくどい話になるが、当日のテレビ中継のあり方を当時の記録であるが、NHKとかTBSといった放送局は、安田講堂の封鎖解除という事件を、機動隊と学生運動家との間でくりひろげられる攻防戦として、ひとつのスペクタクルのように描きあげていったといわれる。一方、NET(日本教育テレビ、現在のテレビ朝日)は、同じように封鎖、解除の状況を中継しながらも、大学闘争を提起し聞った当の学生の生の声をインタビューして聞こうとするが果たせず、結局安田講堂の中に書き残されたという形で、学生運動家の論理と心情に迫ろうとした。この局の中継には事件を単なるスペクタクルとして見せる姿勢ではなく、むしろ大学闘争という事件の原因、責任などの本質をみようとする姿勢がみられて、すぐれた中継であったと評価できるだろう。

NETの放送記者がメモしてきて放送した落書はどんな内容のものであったのかは不明であるが、ルポライターの立花隆が『文芸春秋』一九六九年三月号に「東大ゲ



ダマスカスへの道

バルト壁語録「戦場」に残された落書きにみる夢と苦悩」というルポを掲載している。

一、三の落書を紹介してみると、

「連帯を求めて孤立を恐れず／力及ばずして倒れることを辞さないが／力尽きずして挫けることを拒否する」

「とめて下さいおっかさん／背中の銀杏も笑ってる／女々しい東大どこへもいけない」

(ある法学部教授を名指して)「安全地帯のこちら側から横目でもをいう。中間主義でもなおかつ文句ならたらの御用学者」

(別の教授を名指して)「朝日ジャーナルでめしを食う」

天保義民の一揆のおりにみられた落首とか、東京大学の大学闘争のさいに学生運動家が講堂や研究室の壁に書き残した落書きの中に、支配権力に対する痛烈な、あるときはからかきに満ちた批判と身体的な心情を讀みとることができらう。おそらく、落書きを讀むことによって、大学当局や警察によって発表された公式見解(正史)ではわざと無視されていったであろう運動家の心情と意識と論理とをうかがうこともできらう。『落書きの世界』では、落書を「庶民の心のぞきメガネ」ととらえた理由もこのへんにあるように思われる。

著者のロバート・ライズナーは落書研究の意義とのか

かりで、落書が本来もっている庶民的性格、反体制的性格について次のよう述べている。「明らかに、幾百万もの落書きが歳月の流れによって消されてきた。惜しいことである。庶民にとって人生とは何であったのか、またどんなものをわれわれが知るうえで、貢献するところ大であり、かつ示唆に富んだものであったらう。記録された歴史は、概して支配階級の見地から書かれていて、その階級たるや、おぼろい著作家を支配した昔の貴族であり、今日ではより巧妙に振舞う権力機関である」(同書、一五ページ)と。一方、落書は匿名の民衆が自分を取りまく世界に対して、いく願望や決意を表明したものであり、あるときは外の世界に対して風刺や嘲弄の心情を赤裸々に投げかけたものであろう。それは、「精神的な、心の排泄物」(同書、九七ページ)といってもよい。

差別落書にみる民衆の心 紹介しようか、書かない方がよいのか迷ってはみたものの、結局書きあげてみよう。そしてその落書がわれわれに突きつけるものは何かをいくらかでも考えてみようという思いから書いてみよう。

原理死ね 反原理死ね

民青死ね

スト実死ね

解放死ね

部落は死ね

朝鮮人韓人も死ね

君らは人間のカズだ

差別差別と呼ぶな!

貧乏人は私学に学ぶ資格はないんじや

ついでにエタ同盟や朝鮮人も関大にはくるな

一九八〇年四月九日、法文学舎一号館のバンミルクション前の男子トイレで発見された、確認された差別落書の全文である。「また差別落書があった」と一口でいってしまえばそれまでだが、その内容は多くの運動団体に対する全面否定、とりわけ被差別大衆とその組織に対する、文字どおりの死刑宣告であり私刑宣言である。そして、おそらく落書を書いた本人には本心にぞうしてやりたいという悪意に満ちた願望と自分の書いた落書が当の相手に与えるであろう打撃を計算して楽しむといった、気楽な遊びの気分が入り混じっているのだらう。

落書を目の前にして感じる点を一、二あげると、被差

別大衆を「人間のクズ」と決めつけるという人間観とそれをすることによって落書者が満足したであろう他者に対する優越感、あるいは被差別大衆に「死ぬ」と連発し、いわば凶器の刃を相手の肉体に突きさそうとする人間性に対する全面否定とそうすることによって落書者が感じたであろうサディスティックな排泄感、あるいは「関大にくるな」と叫ぶ排外主義的思想とそう叫ぶことよって得たであろうエリート意識ではないだろうか。さらに推測をかきねると、もし落書者が判明して追究されてみると、「面白半分をやったこと」「悪かった、もうこれからは決してしません」と口先だけで調子のよいことをいって、早々と追究を逃れようとする小市民的保身術さえ持っているように思えてくる。

差別落書に関する共通討議資料を使って議論しているところ、部落差別の落書に見られる「部落民は人間ではない」という意識はユダヤ人の大量殺りく、在日朝鮮人への殺りくを肯定する思想と同質であると述べた説明に対して「論理が飛躍しすぎる」とか「大げさすぎる」といった批判があったように記憶している。

ユダヤ人は最大の豚、ゆえに後悔せずに殺せ。

(一九〇九年、ブレスラウ、ポーランド南西部の都市、旧ドイツ領)

と無視された、かなり数多くの反ユダヤ的な文句の落書きがみられたが、今日の人種差別論者の落書きも、同様に、ただたんなる冗談とか、うっぶんばらしではすまないものかもしれない。『同書』一五六ページと落書の内容をとらえている。また「世紀の変わり目には、ヨーロッパ中部ことにドイツでは、しばしばカトリック教徒とユダヤ人を悪しざまに口汚く罵る目標として、人種的偏見をテーマとする壁文が多かった。展開の途中にある歴史を鋭く観察する者にとって、これらは未来の前兆であった」(『同書』一八ページ)と、落書の内容の中に來たるファシズムの時代の思潮をかきとっている。戦争と侵略と抑圧は一部の独裁政治家や軍部だけで実行できるものではなく、おそらくそれを支持し、激励する民衆の差別意識とか、そのファシズム的な人間蹂躞を「私だけはそのとしておいて」くればそれでよいと黙認していった民衆の意識にも責任を求められることができるだろう。四月九日に発見された差別落書の中に、わたしたちはどうのような「未来の前兆」をかきとることができるだろうか。また、わたしたちは台頭しつつある「未来の前兆」にどのようなかわり方を持つていくことができるだろうか。

黒人よ、帰れ。アフリカは君を求めている。

(リチャード・フリーマン著『落書き』イギリス、ロンドンで刊行から)

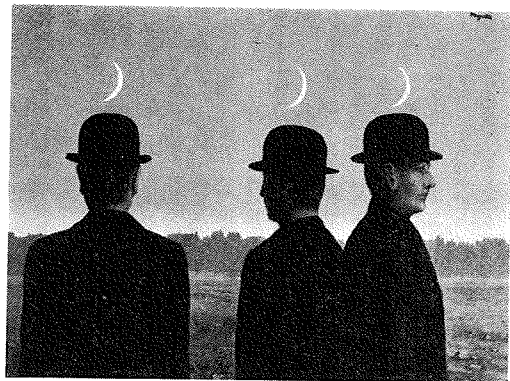
黒人坊は皆殺しだ  
白い奴らも皆殺しだ

でも、私だけはそっとしておいて

(ニューヨーク市、イースト・ウィレッジ、スラック  
ス酒場の男子トイレで)

『落書きの世界』の著者ライズナーが集めた「落書き傑作集」のうち人種的偏見の落書として紹介されているもの一部である。すぐあとで述べるが、著者自身はこうした人種的偏見の差別落書を文字どおり「傑作」と評価しているわけではない。四月九日の差別落書と今紹介した落書とを比べると、相違点よりずっと多くの共通点を見いだせるだろう。意地悪で、悪意に満ち、憎悪をぶつけた内容で、そこには権力者に対して民衆がいだいたであろう風刺と批判精神のひとかけからも見いだせない。まさに差別落書は人びとの差別意識の心を浮きあがらせるのぞきメガネである。

ライズナーは「一九世紀から二〇世紀への移り変わりの頃、ドイツには、あきらかに頭のおかしな者の仕業だ



傑作または地平線の神秘

差別落書に対するたたかい

在日朝鮮人作家の金泰

生(キム・テセ)がPR雑誌の『未来』一九八〇年二月号に発表した「猪飼野再訪下」というエッセイの中で、こんな日本人と在日朝鮮人の会話を取りあげながら、その後、その在日朝鮮人と家族が歩んだ人生を描いている。

——てめえっ、いいかげんにしろ、ここは飲みやしゃねえんだから、電車の中だぞ、そのお客さんだって迷惑してるんだから、ギョア、ギョアおだああげるんじゃねえぞ。

——なんだあーと、運転手の分際で客に説教をたれるのかよ、てめえは黙ってハンドルをいじってれや、いいんだ、子供のおもちゃやみてえな電車をこらがしてろくせに、いっばしの口を利きやがって……それに何だ、朝鮮人みてえな面相しやがって。

筆者の金さんは少年のころ住んでいた大阪の猪飼野を再訪して、自分の友達だった在日朝鮮人Kさんの思い出を語っているのだが、それによると、Kさんは太平洋戦争がはげしくなる少し前に市電の運転手に採用されて勤務中の夏のある夜、一人の酔っ払いが乗客にしつこからんで、女性の車掌がいくら遠慮しがちに注意しても聞こうともしないので、運転中のKさんがいらだちその酔客となりつめた。その時の会話のやりとりは先に紹介したとおりだが、「その、朝鮮人うんぬんの一言がK

の調子を狂わしました。逆上した彼は停留所の間中であるのかまわず電車を停め、その酔客を引きずりおろしてしまいました。そして電車を発車させたのですが、興奮していた彼は次の停留所の直前でうっかり男の老人をはねて大けがをさせました(同、一九一—二〇ページ)という。そして、この一件をさかいて、Kさんの身辺に暗い影がさしはじめて、些細なことからの口論中に犯した殺人のために服役中に脱走したまま、三十数年たった今でも、行方も生死も不明であるという。

筆者のKさん人物評によると、ちよっと短気なところがあった、とつくみあいのいさかいをよく起こしたが、根はひどくさびしがりでやであったといわれるし、面倒見のよい、きっぷのよい先輩だったともいわれる。Kさんの人生の歩みを踏みはずさせたのは、彼の「ちよっと短気なところ」のある性格だったのだろうか。それともKさんの運転がまだ未熟だったのだろうか。先の『猪飼野再訪』を読むと、日本人による朝鮮人差別にその原因を求めることができるだろう。それもたまたま一言の「朝鮮人うんぬん」の差別発言にあったことは明らかである。この民族差別は三十年前昔の日本帝国主義時代の出来事であったとともに、現在の民主主義時代であってもなお存在する差別状況である。この点は四月九日発見

の差別落書によってはっきりと裏付けられている。

差別落書に関する共通討議資料をめぐって議論していると、「差別落書を書くことはいけないことだ」「差別落書を書いた者は誰か分らない」「大学として差別落書に対してどれほど責任があるのか(ない)」といった三段論法めいた意見を聞いたことがある。差別落書の問題を「落書を書いた者は誰か」に焦点をしばって、落書の倫理性だけを問題にしようとするれば、当然のことだが、出口のない迷路に迷いこむか、成果の期待できない堂々めぐりの議論に落ちこむだけのように思われる。『落書きの世界』の著者によると「私はかなり徹底的に調査したけれども、いまだかつて、だれかが落書きを書いている現場にぶつかったことはない(同書、一三五—一三六ページ)」といっているように、落書の「犯人」探しほど無駄なことではないだろうし、もし強行すればその過程で人権侵害を起こしかねない。

『部落地名総鑑』差別事件がさうであったように、一冊の全国被差別部落リストを作って売ろうとした興信所関係者が差別の責任を問われるだけではなく、その購入の呼びかけ文を読んで何も差別性に気づかなかった人たちにも、もちろん就職・結婚の身元調査をするために購入した企業・学校・個人の差別体質にも問題がある。差

別落書についてみても、落書者の行為はもろんのこと、その落書をトイレの中で発見していながら「差別」と気づかない学生とか、たとえ気づいても黙認してしまう学生のあり方にも問題があるだろう。また、差別落書の解消のために取り組むと口約束しながら、その具体的取り組みをストップさせてみたりして、遅々として進まない大学の姿勢にも問題があるだろう。そこに差別の構造をみる思いがする。

差別落書はなぜ文字どおり差別になるのか、あるいは統廃する差別落書をどのようにして解消していくのか。たとえ落書者を発見して、「差別はいけないこと」とタテマエ論を説教してみたところで、それほどの効果も期待できないだろう。差別落書の問題を考えるにあたって、絶対に忘れてはならない視点は間違いない、落書によって嘲弄され、人間としての誇りを傷つけられる被差別大衆の立場であり、その被差別大衆がもつ差別への怒りと解放への思想ではないだろうか。そのことをわたしたちはどうするか。

共通討議資料「人権意識を高めるために」の中でも紹介されている文章だが、全国同和教育研究協議会委員長だった西口敏夫は「荆冠の呼び」掲載の講演でインソップ

の寓話を引きあいに出して次のように語りかけている。その叫びに耳を傾けてみよう。

イソップの物語にこんなありましたやろ。イソップの子どもが田んぼへ向けて石を投げている。田んぼの中のカエルが「やめておくれ。あんたの投げる石がわしに当たったら、わしは死んでしまうんや。やめておくれ。石を投げるということは、あんたにとってはおもしろい遊びかしらんけど、わしに当たったら死んでしまうんや。石を投げるのはやめておくれ」と叫んだという話や。差別する者は、なにげなしに簡単に話しているけれども、差別を受ける方はそうと違ふ。『ヨツ』とたった一言言うただけや。ささいなことや」とあな方は平然とおっしゃるけれども、その一言がグサッと鋭い刃物のように私の胸に突き刺さるがな。「なにがヨツじゃ、なにが部落じゃ、エタじゃ、謝れノ」これが糾弾です。これが叫びです。ささいなことではあれへん。部落の人にとったら、差別されるということは命にかかわることや。せやから糾弾が始まるんや。差別というのはズツと重くこたえるんや。

『荆冠の叫び』（解放出版社）八二ページからの引用であり、二回にわたってまとめたわたしのレポートの結論



最後の叫び

でもある。（社会学部教授・たみや たけし）

## 日本中国

### ことばの来<sup>ゆ</sup>往

その2

芝田稔

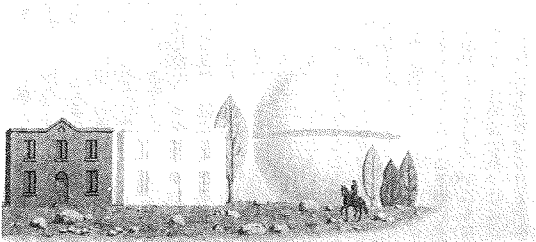
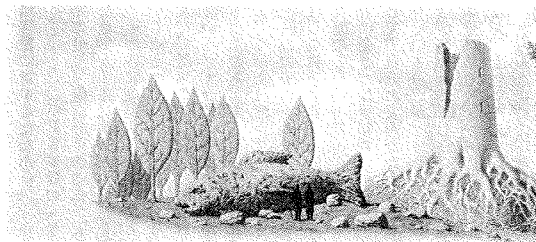
同音異義のことばは、言語生活のなかに或種の潤をづける作用をもっている。落語のオチはおなじみのことばが、中国でもこれを利用したおとぼけや辛辣な風刺までその成語は山とある。

しかし、ことばのうちがう日本語と中国語との間に起るこうした言語現象は全く見当がはずれ、とんちんかんの勘違いを生む。先に述べた「ハンマー」と「かえる」、「実」のつもりでいったことばが「柿」に化けたりするのは、同じとんちんかんでも、まだお愛嬌というものだ。ところが、それが人を相手の罵詈雑言であったり、卑猥なことばであったりすると、お愛嬌どころではないのである。

その一つに、最近登場してきた流行語——「ワンパターン」というのがある。

ここに取上げる「ワンパターン」は、「一本調子」とか「単調な一本箱」ぐらいの意味に用いられており、正確に表記すれば「ワン・パターン」となるのだが、それが私には「ワンパー・タン（王八蛋）」と聞こえたのだから驚いた。

去る六月、具志堅用高選手が十三回目の挑戦者をノックアウトして、チャンピオンの座を守り切った時のこと。テレビ解説者の一人が、挑戦者の攻撃方法を批評していたのであるが、そのことばのなかに、私の耳に突きささ



無知の妊婦

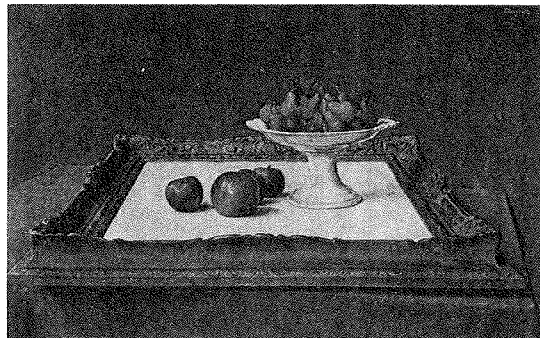
ったのが、それであった。

「彼はワンパターンのから……ダメでしたネ」

このことは聞いた時「なんと、どぎついことをノ」  
 一瞬、私はヒヤリとした。戦後、北京を引揚げてから三十数年にもなるが、このことばを、人さまの口から直に耳にしたのは、これが初めてであった。だが、この強烈な一言によって、三十数年間眠りつつけていた私の言語神経の一つが、急に叩き起きたのであった。それは「はじしらす」とか「うすのろ」などといわれる罵詈雑言ではないか。しかも、いま具志堅の強烈なパンチの連打をくって、マットに沈んだばかりの相手であり、万人が固唾を呑んで観戦していたテレビ放映の最中である。人事ながら、タイミングよろしく、パンチの効いたこのことばは、私の古い記憶を呼び起すのに十分であった。

「ワン・パター」と「ワンパー・タン」とは、本来語調やリズムにちがいががある。だが、日本語のなかに挿入される日本人の外国語音というものは、そんな微妙なちがいで表現されることがないのである。流行語にもとんだ落とし穴があるものだ。

さて、次は気が進まないのである。正直いって具体例となると、戸迷う代物しか浮んで来ないからである。と  
 いって、ここで筆を折るわけにもまいらない。そこで、



良識



恋人たち

詳しい説明を抜きにして、そんなことばもあった、ということだけで、かんべん願いたい。

これもテレビの宣伝文句の一つ、アルバイト募集の「さあ、こい、パート」が、それである。むろん、中国語音はこの通りではないし、漢字の当字もない。全くの口頭語であり、しかも限られた一地方だけに通用することばであったから、今日では或いは死語になっているかも知れない。むしろどうあって欲しいのだが、このことばは、私にとって四十数年前の記憶を蘇えらせる「いやーな」ことばである。

西も東もわからない、未知の土地、未知の人々、未知の仕事、未知のことば、そんな環境のなかで、上述のように「うすのろ」か小僧扱いされながら、何時とはなく自然に教えられたことばだからである。なにしろ、これは日本兵が日露戦争当時、撫順附近に残して行った下卑なことばであるが、それから三十年後の昭和九年頃にはこの地方の土語と化していたのである。中国語だと思ひ込んでいたこのことばが、元は日本兵が置いて行ったものであることを知った時、呆氣にとられたものの、なんの事はない、私はこれら前人たちの尻拭いぞ、現地できせられていたのだ。因果は回る」といわれるが、まことに因果なことばではあった。

さて、同じ頃、現場で身を以て覚えたことばに、こんなものがある。それは職場でのベテランに対する「新米野郎」ということばだ。今日の共通語では、素人のことを「ワイハン」外行」というのだが、現場ではこんな文章語を使わない。

採炭作業の見習いを始めて間のない頃だった。所定の切羽に降りて行くと、私を待っている労働者たちの車座の輪からドッと笑い声が起る。中国語が判らない私は、今日でいうところの「熱烈歓迎」に似た挨拶だと信じ、彼らと一緒にになって、自分も笑顔を振り撒いていたのである。知らぬが仏、なんと滑稽な風景ではないか。ところが、以心伝心？ 目を重ねていくと、この挨拶は、どうもおかしいのだ。

「○○ライラ(来)了○○がやってきた」

これはすぐ聞き取ることができたが、肝心の○○が判らない。どうせ笑いのものになる「ヤツ」にちがいないがジーンとがまんしているほかなかった。やがて、それが「バイ・マオズ」白帽子」らしいと判ったのだが、その意味が判らない。それは、新参者を「コバカ」にしたことばだと、教えてくれた寮の先輩は、さらに「こんど、いわれたら、どやしてやれよ」と憤慨した。

翌日、私は鬼の首でも取った思いで、切羽へ降りて行

った。そして真正直に、それを実行したのである。おかげで、労務課のヒゲさんからは、さんざんしぼられた揚句、始末書まで取られる始末だった。

因みに、所変われば品変わる、というが「関外(山海関以東)の東北地方では、あなどれがちのこの「白帽子」も、万里ノ長城を越えて「関内(山海関以西)」に入ると、それは泣く子もだまる警察官の異称となる。後日北京に任みついてから、それが判ったのである。(つづ)

(中国文学科教授・しばた みのる)



# 北京で生活して (二)

はじめに

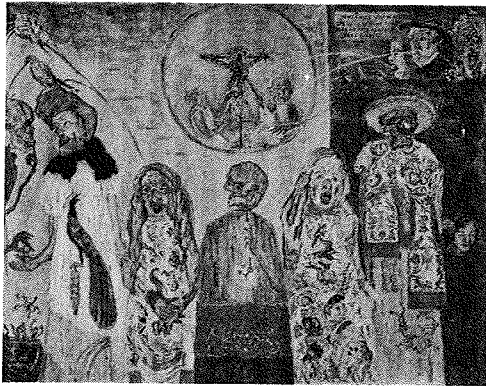
鳥井克之

一九七八年二月二十七日から一九八〇年三月九日までの二年余り、北京で生活する機会を得た。前半の一年間は日本向けに出版されている日本語雑誌『人民中国』社で、中国人が翻訳した日本語の文章を改稿する仕事を通して、自国語を外国語に翻訳する際に生じる問題点を研究し、それらをまとめて、『人民中国』社の翻訳グループに講義し、さらに、昨年五月には、『北京大学一九七九年《五四》科学討論会』で、『中文日訳におけるいくつかの問題』というテーマで研究報告した。後半の一年間は北京大学東方言語・文学部日本語学文学科で、大学二年生用の総合的な日本語教科書『基礎日語』(全三十課、四十

五万字)の内部発行本の原稿執筆とその研究会を行ない、そのかわら週一回、半日を若い労働者、農民、兵士自身の教員と共に、日本語と中国語との比較構文の研究を行なった。さらに国語国文学科の朱徳熙教授、陸陰明助教授の中国語文法論研究のゼミと講義に参加した。当初は単身で赴任する積りであったが、最初の留学先が大学や研究機関ではなく、加えて二年間の留学は「学校法人関西大学 例規集」の規定により、休職扱いということになったので、思い切って家族六人を伴って中国に赴いた(後半の一年間は休職扱いを解かれた。そのため、単身赴任とはまた異なった生活体験をすることが

できた。殊に子供たちにとっては、二年間の北京生活は貴重な体験になったことであろう(拙文「北京で二年間暮した子供達」を、『奈良新聞』に連載中)。時期としても『四人組』が追放されて一年半が経過し、全国が総力を挙げて、今世紀内に「四つの現代化(農業、工業、国防、科学技術)」を実現しようとするスタートを切った時に、私達一家は北京に住み始めたのである。

私達たちや中国國務院直属の外国人専門家局より招請された日本をはじめとする世界各国からやって来た専門家たちのうち、北京に赴任した人たちは、ほとんど大部分が北京市の西部部の海淀区にある「友誼賓館」に住んでいる。「友誼賓館」は北京市の中心地である天安門広場から北京大学や頤和園、香山公園へ行く途中にあり、市の中心から約十三、四キロメートル離れた所にある。はじめはソ連を始めとする東欧諸国の専門家、技術者の宿舎として、また国内の全国会議の議場や宿舎として使用されていた。一九六四年に開催された「北京科学シンポジウム」もここで開かれたのである。参加四十四カ国、全代表三百六十七名がここに集い、日本からは坂田昌一団長をはじめ六十一名の代表が参加した。数年前からは増大し始めた一般外国観光客も宿泊するようになり、私たちが滞在した二年間には目立って多くなった。ほぼ



悪名高い生体解降者

八百四四方もある構内の中央部には長期滞在用者の建物  
が四プロットあり、その周辺部には短期滞在用者の私たちの  
宿舎がある。客室が二千六百三十、全ベッドが三千、食  
堂が九ヶ所ある北京でも最大のホテルである。なお構内  
には大会議場、劇場、プール、体育館、花壇、銀行、郵  
便局、売店、写真館、書店、理髪店、診療所があり、一  
つの町を形成しているといっても過言ではない。それと  
言うのも「友誼賓館」の構内に隣接して、従業員の宿舎、  
大食堂、それに子弟の通う幼稚園、小学校が設けられて  
いるからだ。所用のため私は二回、一週前後あつづ帰国  
したが、そこで九二年間、生活したのである。

日曜日と休日以外は毎日、「上海」号の乗用車に四人ず  
つ乗り合わせて、「人民中国」雑誌社と北京大学に通つた。  
北京大学は「友誼賓館」から自転車十五分たらずの所  
にあるので、ほとんど自転車であつた。途中、少し寄り  
道をして新本を売る海淀や中関村にある新華書店や、古  
本屋の海淀中国書店で本を買つたり、黄庄にある自由市  
場をヒヤカしたり、時には一般の中国人が食事をしてい  
る食堂に入つてビールや「二鍋頭（北京の地酒で焼酎の  
一種）」を飲んだりして帰るのが楽しみであつた。日曜  
日や休日は家族を連れて旧市内にある王府井や前門の繁  
華街に出かけたり、外国人専用の「友誼商店」へ日用品



カーニヴァル

や食料品の買い出しに行つた。月に二、三回、ウィー  
ダーの半日を割いて、中国人の専門家による講義や講演、  
たまには学校や人民公社や工場などの見学があり、年に  
一回、二、三週間ほどの中国国内旅行に招待されて、見  
聞を広めることができた。夜は、「友誼賓館」が旧市内の  
中心街から隔離された所にあるため、テレビを見るぐら  
いの劇場で週一回の映画を觀賞するか、ホテルを見るぐら  
いが閑の山である。しかし、時どき、旧市内の劇場へ新  
劇、京劇、地方劇、音楽会の觀賞に向くこともあつた。  
以上が北京における二年間のおおまかな生活環境であ  
り、生活振りがあつた。以下に、その間に体験したこと  
や見聞したことなどを紹介して行きたいと思う。まず最  
初に一年間余り通つた北京大学の紹介から始めることに  
しよう。

## 北京大学

日本の大学であれば、おおかたの大学は大学案内と  
大学要覧とかいったものを印刷して、各大学の紹介を行  
なっているが、中国の大学ではそのような刊行物はまだ  
本格的に出していないようだ。北京大学も例外ではない。  
「新生手冊（新入生ガイド）手帳」が出ていていると聞い

ていたので、是非入手したいと思つて、北京大学外事処  
（北京大学が招請した研究者や留学生の世話をしたり、  
北京大学を訪問する外国人を接待したり、また外国の大  
学や研究機関との交流を行なつたりする事務機構）に申  
し込んだが駄目であつた。日本人留学生にもその入手を  
頼んで見たが、かれら自身も発行部数が少ないとかでも  
らつていないと言ふことであつた。結局、私たちが外国人  
は口頭で説明を聞くしかなくあつた。あるいはまだ外国に  
対して積極的にPRしようとする方針が打ち出されてい  
なかつたせいかも知れない。だが、口頭では何度か説明  
を受けることができた。以下に記す内容はその時のメモ  
にもとづいたものである。

〔簡史〕北京大学は中国で最も早く創設された大学の一つ  
で、その前身は一八九八年に設立された「京師大学堂」  
であり、辛亥革命後、「北京大学」と改称された。北京  
大学の歴史を語る上で忘れることのない三人がいる。  
ロシア十月革命の影響を受けて、中国革命の先駆者とな  
り、中国にマルクス主義を紹介、宣伝し、さらには中国  
に最初のマルクス主義研究会を組織した北京大学教授で  
同図書館長でもあつた李大釗（一八八九—一九二七年）、  
五四運動前夜に北京大学図書館に勤務し、マルクス主義  
を積極的研究、宣伝し、中国共産党の創設に参画し、

中華人民共和国のリーダーとなった毛沢東（一九三〇—一九七六年）、中国における文化革命の旗手となり、文学者であり、思想家であり、革命家でもあり、北京大学でも教鞭をとった魯迅（一八一——一九三六年）の三人である。また歴史上の大きな出来事としては、一九一九年五月四日に、中国における新民主主義の発端となった「五・四」運動が勃発したが、北京大学こそは、その運動の根源地であったということである。

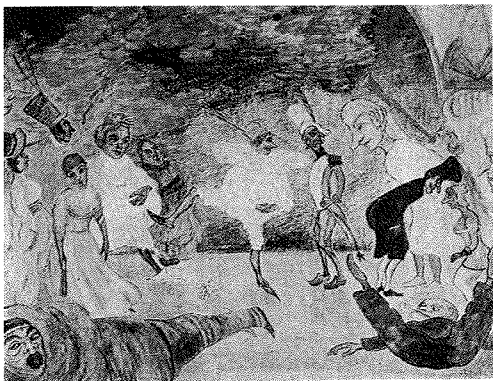
蔣介石が支配していた二十余年間にも、北京大学はその輝いた革命の伝統を受け継ぎ、進歩的な教員と学生は中国共産党の指導を受けながら、たえず反動的支配と日本軍国主義との闘争を勇敢に行なった。一九三五年に全国の人びとに抗日に立ち上がることを訴えた「一二・九」愛国運動では先頭に立って闘い、一九三七年に日中戦争が起るや、北京にあった清華大学と天津にあった南開大学と共に、中国南部の雲南省昆明市に疎開して合併し、「西南聯合大学」となった。日中戦争に勝利した一九四五年には北京にもどり、内戦に反対し、民主主義を勝ち取る運動の前列に立ち、第三次国内革命戦争の時期には、内戦・飢饉・迫害に反対する運動にも積極的に参加した。だが、北京大学の実権は反動派に握られていたため、解放前の北京大学は半植民地半封建的な大学となり、學術

壮大なものとなり、政治面と専門分野の教育と研究面の水準もたえず向上していた。學術研究活動が広範に展開され、多くの成果は国内の先進的水準に達し、あるものは国際的水準にまで到達していた。化学部が中国科学院化学研究所と協力して完成させた世界最初のインシュリンの人工合成の成功などがその一例であった。大量の機器設備や文献図書資料を購入し、教学と研究のよりすばらしい物質的条件をととのえた。文化大革命前の十七年間、北京大学は一貫してマルクス・レーニン主義の道を歩み、名実共に社会主義的な大学になっていたことは事実が証明していた。

ところが、文化大革命が始まると、林彪、「四人組」は党と国家の最高指導権を横取りしようという、よこしまな企みを達成させるために、その代理人を通じて北京大学を支配した。かれらは党の指導を破壊し、無政府主義を煽動し、大量の冤罪などをデッチ上げて、革命的な幹部や知識人に迫害を加えた。かれらはまた学生募集要綱の水準を低下させ、教研室（学科単位の研究組織）日本の学科研究室に相当）を解散させ、基礎理論の学習に反対して、教育の質を著しく低下させた。さらに、かれらは学内の機器設備や文献図書資料を破壊、占領して、學術研究や科学実験の活動を停滞させた。このため、北

研究や科学活動は衰退し、学生運動は血なまぐさい弾圧を受けていた。加えて、教員や学生は政治面では迫害を受け、生活上では何らの保障もなく、教育と研究の活動は停滞していた。

一九四九年一月、北京が解放されると、北京大学は人民のふところにもどり、同年十月一日に中華人民共和国が成立してからは、党中央は北京大学の発展に非常に大きな関心を払った。毛沢東主席は北京大学の教員と学生が團結して新しい中国の建設のために奮闘するように励ます書簡を三度も送り、周恩来総理は自から六度も大学を視察して講演し、宋徳、陳毅、李富春といった党中央の指導的地位にある人びとも相前後して大学を視察して、助言を与えられたことがあった。北京大学は党中央の厚い配慮のもとで、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想に導かれて、教育はかならずプロレタリア階級の政治に奉仕し、生産と労働に結びつかなければならない」という教学方針を一貫して堅持して、大学の根本的な改革を行ない、各方面でいずれも極めて大きな成果を上げた。文化大革命前の十七年間に二万名近い学部卒業生と一万余りの研究生（日本の大学院生に相当）を社会に送り出し、全国各地の農業、工業、科学、教育、文化の第一線で活躍している。大学の教員と学生の隊列はたえず



異様な無階会

京大学はこれまででない大きな災難に遭遇した。

一九七六年十月、あらゆる罪惡を犯した「四人組」が追放されると、北京大学はまた新たな解放を得ることになった。華国鋒主席をはじめとする党中央の指導のもとで、「四人組」、北京大学における四人組の代理人とその別動隊の反革命グループ——「梁劭（北京大学と清華大学の両校に巣食っていたグループのベンネーム、梁劭と両校とは中国語音でも同音である）」を徹底的に批判した。そして、党の幹部政策と知識人政策を断固として着実に実行し、広範な幹部と知識人の革命に対する積極性を触発したことによって、教学と学術研究はしだいに正常にもどり、今では、大学における活動の重点はすっかり教養と学術研究に転換されてしまったのである。

〔現況〕北京大学には現在、中国言語文学部、歴史学部、哲学部、経済学部、法律学部、国際政治学部、図書館学部、東方言語文学部、西方言語文学部、ロシア言語文学部の十の文科学部と、数学部、力学部、物理学部、無線電子工学部、地球物理学部、技術物理学部、コンピュータ工学部、化学部、生物学部、地質学部、地理学部、心理学部の十二の理科学部がある。つまり全学で二十二の学部があり、その下には六十二の学科（その詳細に

ついては各学部の紹介で説明する）がある。さらにこの他に、日本の大学院に研究所的機能を加味した研究所として、数学、固体物理、理論物理、重イオン物理、コンピュータ工学、物理化学、分子生物学、南アジア、アジア、アフリカ、外国哲学、データ通信を研究する十一の研究所がある。在籍学生数は九千人近くあり、そのうち研究生が五百名余り、進修生（一度、大学高等専門学校を卒業して就職したが、専門分野での業務水準を向上させるため、もう一度、一時的に職場を離れて、大学や研究機関に入って、専門知識をより一層深く研究する学生、日本の研修生に相当）が六百名余り、さらに世界の三十余カ国から来た外国人留学生が百五十名ほど含まれている。なお、全学の教員、科学実験技術員、職員は全部で三千名近くいる。一九七六年には新しい四階建ての図書館が建設され、そこには蔵書三百二十万冊、閲覧室三十一室、座席数二千四百余りがあり、さらに今年の一月から松下電器産業から寄贈されたテレビ教材製作室とLIL教室が四階南東部に設けられた。（この項続く）

（中国文学科教授・とりい かつゆき）

## お知らせ

書評編集委員会では、「書評」誌発行を媒介として文化運動を展開していこうとしています。具体的活動は「書評」誌の編集発行と、講演会、映画会等の開催です。生協本部3F、書評編集委員会までおいでください。

なお、編集委員には若干の活動費が支給されます。

### 投稿募集

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等や、研究成果の発表、論文、エッセイ、小説などの自己表現作業としてあるものをお寄せください。また、「書評」誌に対する意見、批判でも結構です。

投稿規定は次の通りです。

△原稿は原則として縦書きで、一行二五×二二行（五五〇字）を一枚とし計算します。枚数は自由です。なお必要なる場合には原稿用紙をお渡しします。

△原稿には住所・氏名・学部・電話番号・連絡先を詳しく明記してください。

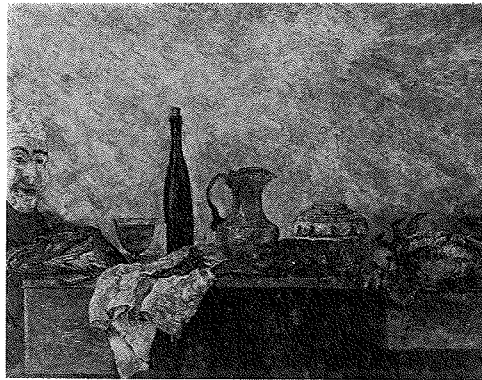
△原稿は一切返却しません。必要な場合はコピーをとってください。採用分には連絡します。

△採用分には、資料代として五〇〇円を進呈します。

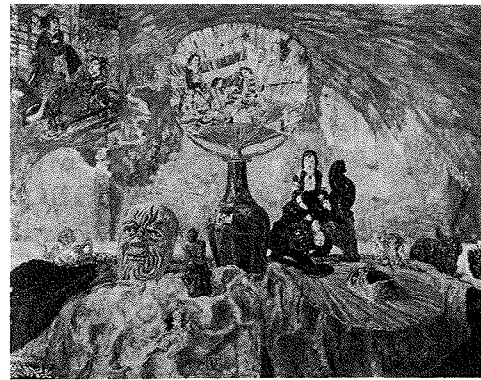
△送り返

〒565 吹田市千里山東三丁目一〇一 関西大学生活協同組合「書評」編集委員会〇六一三八八一―一二  
一 内線七七六





海老や蟹を眺める仮面



支那陶器のある静物

## 編集後記

特集を組んでは失敗し、また特集を組むというパターンを繰り返し、何ら読者が参加し、討論し、批判し合う場を与えてこなかった、というのがここ数年の「書評」誌の実態だっただろうと反省しています。

そこで私達は、この九月から「書評」誌の読み合せ会や批評会をやつてゆこうと考えています。つまり、読者の皆さんが参加する場を提供し、共に「書評」誌のあり方について考えてゆこうと計画しています。

また、この「書評」誌の読み合せ会や批評会をやつてゆく目的には、この「書評」誌を出しているのが生協つまり読者の皆さんがいつも飯を食っているあの生協であるということを知らせてゆくこともあります。これはなにも、「書評」編集委員会という所が生協に印刷を頼んでいるということではないのです。生協に「書評」編集委員会が、「書評」誌を出しているのです。では何故、皆さんがいつも飯を食っているあの生協が、この「書評」誌を出すのでしょうか？ 読者の皆さんも積然としないところであろうと思います。それは簡単に言ってしまうばこういうことです。

生協運動とは、簡単に言ってしまうば「文化運動」なのです。というのは、私達は、生活文化と考えるからです。では何故生活文化とできるのでしょうか？

例えば、私達は「服」を着て暮らしています。「なんだ、当り前じゃないか？」と、皆さんは思われませんが、果してこの「服」を着るということが、当り前の行為でしょうか？ 否、です。何故なら、いわゆる未開と呼ばれる地域において、「服」を着るという行為自体、非常に「羽んだ」行為であると考えられているからです。つまり、「服」を着る行為は生活は、その地域の文化程度に規定されていることができます。

このようなところから、私達は生活文化ととらえます。だから、生活物資を媒介とした生活振興をはかる生協運動とは、文化運動なのです。

『そこまではわかった。でも、生活物資を媒介とした文化運動をやっておれば、生協はそれで良いのではないのか？』という声が、読者の皆さんから聞えてきそうです。『なにも本まで出さなくても、生協は生協で機能するのではないのか？』

確かにそうです。が、ここで考えて欲しいのは、生協とは元来、資本主義経済体制に抑圧された経済的弱者が互いに力を合せ、協同してできた組織であるということです。そして、資本主義経済体制は、弱者を経済的に圧

迫するだけでなく、感性までを規定し、隷屬下に置くのです。だから、資本主義経済体制の中において目からの生活を守るためにできた生協は、資本主義に規定され、隷屬下に置かれた私達の感性、意識を解放し、変革する任務を持つ必要性があるのです。

このようなところから、生協は、「書評」誌というものを通して、資本主義に規定され、身動きのとれなくなつた私達の感性を解放し、変革してゆこうと色々な問題提起を試みているのです。

以上、生協が何故、「書評」誌を出すのかを述べて来ました。それを踏まえた上で、九月以降の「書評」運動の盛り上げ、発展を、読者の皆さんにお願いする次第です。また、積極的に本の書評、内容紹介、批判、研究成果の発表、論文、エッセイ等の投稿を併せてお願いする次第です。また、投稿にとどまらず、直接「書評」編集委員会の部屋(生協3F)に来て、私達に対する意見、批判、苦情等を出して欲しいと思います。私達は、いかなる小さな意見をも「書評」誌に反映してゆこうと考えています。そして、九月以降の「書評」誌の読み合せ会、批評会、各種の文化運動——講演会・映画会——を、「書評」誌の読者の皆さんと共に盛り上げてゆきたいと考えています。「書評」運動の新たな高まりをつくらう！  
混沌の文化状況に、我らの火をともしよ！

(K)



花と野菜